

1989  
6

# 聖徒の道

末日聖徒イエス・キリスト教会



# 聖徒の道

1989年6月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月間——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン  
 十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット  
 顧問：ヒュー・W・ピノック、ジーン・R・クック、ウィリアム・R・ブラッドフォード、ジョージ・P・リー、キース・W・ウィルコックス  
 編集長：ヒュー・W・ピノック  
 教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン  
 編集主幹：ブライアン・K・ケリー  
 編集副主幹：デビッド・ミッチェル  
 編集主幹補佐：アン・レムリン  
 編集主幹補佐/こどものページ：  
 ディエーン・ウオーカー  
 アート・ディレクター：M・マサト・カワサキ  
 デザイナー：シエリー・クック  
 制作：シドニー・N・マクドナルド、レジナルド・J・クリステンセン、ジェーン・アン・ケンプ、デモシー・シエバート、スティーブン・デイトン  
 配送部長：ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1989年6月号第33巻第6号  
 発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
 〒106東京都港区南麻布5-10-30  
 電話 03-440-2351  
 印刷所 株式会社 精興社  
 定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)  
 半年予約1,100円(送料共)  
 普通号150円、大会号350円

International Magazine PBMA 8906JA  
 Printed in Tokyo, Japan.  
 Copyright © 1989 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.  
 ●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課☎03-440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター☎0427-96-2820

The *Seito no Michi* is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price \$14.00 a year, \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to *Seito no Michi* at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

●——もくじ

## 大管長会メッセージ

キリストを思う	エズラ・タフト・ベンソン	2
開拓者の遺産——すべての教会員の受け継ぎ	シドニー・スミス・レイノルズ	6
教会の救援事業——断食の捧げもの	アイザック・C・ファーガソン	10
ブリガム・ヤング——その若き日々	S・デルワース・ヤング	18
霊的な知識について	テリー・ジェンクス	25
父を知らない私	クロード・バーナード	26
母国の民に福音を伝える	マービン・K・ガードナー	28

## 家庭訪問メッセージ

それだからあなたがたも 完全な者となりなさい		36
---------------------------	--	----

## 青少年のページ

人生の勝利者	ケンドラ・カスル・フェイア	37
モルモンメッセージ		42
指導者に関するメッセージ		43
もしこの教会を知らなかったら	ラッセル・C・テイラー	45
赤いコート	ビバ・メイ・ギャメル・ウィルコックス	47

## 子どものページ

雲のはしら	クリスティー・モンソン	2
聖霊のたまもの		5
えいゆうたち：グリーン・フレイク——黒人開たく者		6
おもちゃばこ：かいたくしゃパズル		8



表紙の説明——「西方への旅」ハロルド・I・  
ホプキンソン画。© 今月号で取りあげた開拓  
者の精神は、人々の記憶に残るだけでなく、  
現代の末日聖徒の生活の中にも脈々と生きて  
いる。



# キリストを思う

大管長

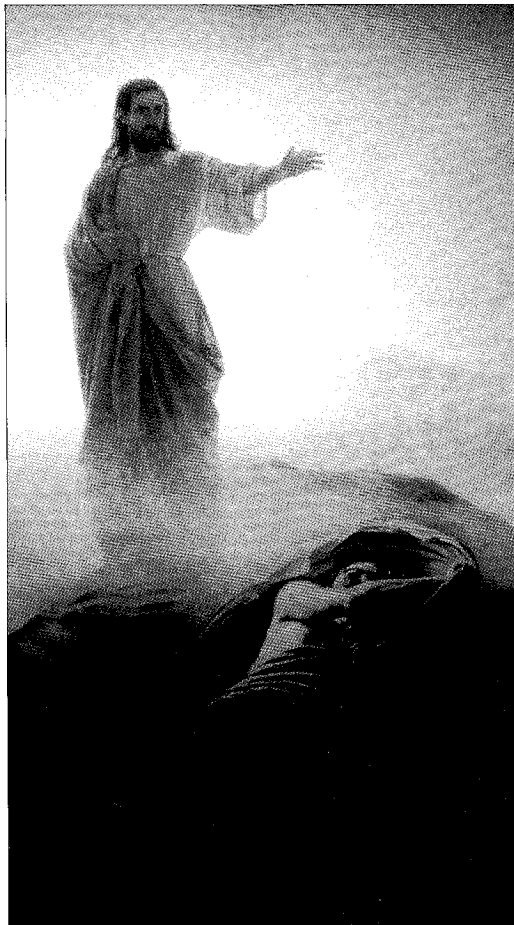
エズラ・タフト・ベンソン

**ジ**ョージ・アルバート・スミス  
大管長は、まだ子供のころに、自分の人生を大きく変えるひとつの体験をしました。その体験について彼はこう書いています。

「私がまだ少年で13歳のころ、ブリガム・ヤングアカデミーに通っていた。……そこにいた1年の間にいろいろなことを聞かされたが、今となってはそのほとんどを忘れてしまった。しかしただひとつ、決して忘れることのできない話がある。……ある日、メーザー教授が次のような話をした。『皆さんは自分の行ないだけでなく、心の中に抱くその思いに対しても責任を問われるでしょう。』

私はまだ少年で、自分の思いを治める習慣が身につけていなかった。どうしたらよいのだろうか、私はそのことでずいぶん頭を悩ませた。……それから1週間か10日ほどたって、メーザー教授が言わんとしたことに思い当たった。……なぜ自分の思いにまで責任を問われるかという、この世の生涯を終えるときに、その人の人生は日々の思いが集積されたものになっているからである。

この言葉は私の生涯を通じて豊かな祝福となり、様々な状況の中であって、正しからぬ思いを抱くことのないように力を与えてくれた。それはこの世の働きを終えたときに、私を形作るの自分自身の思いであるということ肝に銘じていたからである。」「(人々と福音を分かち合う」 pp. 62-63)



## 救い主ならどうなさるだろうか

にせよ。」(III ニーフアイ12：27-29)

なぜそのような情欲を心の中に抱くのでしょうか。聖書には、「人となりはその心に思うそのままであるからだ」と書かれています。(欽定訳箴言23：7)

## 祝福の源となる思い

人間の心は舞台にたとえることができます。その舞台で

## 人格の基となる習慣

思いは行ないの基となり、行ないは習慣を形作ります。そして習慣は人格を築き、人格は私たちの永遠の行く末を決定するのです。

ベンジャミン王はこの原則をよく理解していました。彼が偉大な説教の終わり近くで述べた言葉が、モルモン経には次のように書かれています。

「終りにのぞんで、私は罪を犯す手段をみなあげてお前たちに話すことはできない。罪を犯す手段方法はいろいろあって数えつくすことができないほど多いからである。」(モーサヤ4：29)

そして最後に、自分自身と自分の思いに注意しなければならないと勧告しています。(モーサヤ4：30参照)

キリストは復活の後にアメリカを訪れ、こう言われました。

「見よ、昔の人々は汝ら姦淫すべからずと記せり。されど、われ汝らに告ぐ、情欲を抱きて女を見る者は心の中すでに姦淫したるなり。われ汝らに命ず。汝ら慎みてかくのごとき情欲を己が心の中に抱かざるよう

は一度にひとりの人しか演ずることができません。私たちを愛している主は、この舞台の上に良い思いを立たせようとしておられます。もちろんそれは祝福の源となる思いです。一方私たちを憎むサタンも、舞台の片袖から悪い思いを押し立てようと躍起になっています。それは私たちにのろいをもたらす思いです。

私たちはこの舞台の監督です。どちらの思いを舞台に立てるか自分自身が決めるのです。主が私たちに、ご自分と同じように完全な喜びを得てほしいと願っておられることを忘れないでください。サタンはすべての人を、自分と同じみじめな有様にしようとしています。どちらの思いを受け入れるかを決定するのは、各自の責任です。私たちは

### ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点について話し合うとよいでしょう。

1. 私たちは自分の行ないだけでなく、心に思うことについても責任を問われる。
2. 思いは行動の基となり、行動は習慣を形作る。また習慣は人格を築き、人格は私たちの永遠の行く末を決定する。
3. 主は私たちに、ご自分と同じ完全な喜びを受けるようにと望んでおられる。一方サタンは、すべての人を自分と同じみじめな有様にしようとしている。
4. ベンソン大管長は、「主よ、わたしがどうするのをお望みですか」という質問より大切な問いかけはほかにはないと述べている。

話し合いを進めるために

1. 思いを制し、キリストに倣った生き方をすることについて、自分の考えを述べる。
2. 心に思うことによって、行動が決まり、どのような人間になるかが決まるという点について、担当家族の考えを聞く。
3. このメッセージの中に家族で読んだり話し合ったりするのに、よい聖句や言葉はないだろうか。
4. 話し合いをより充実したものとするために、前もって家長と話し合っておく必要はないだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。

選択の自由を与えられていますが、選択の結果まで思いどおりにすることはできません。人となりは、心の中の舞台に常にどのような思いを立たせるか、すなわち何を思うかによって決まるのです。

ときには、この舞台からなかなか悪い思いを追い出せないこともあるでしょう。ボイド・K・パッカー長老は、そのために靈感あふれるシオンの歌をうたうようにと提案し

ています。故ブルース・R・マッコンキー長老は、心の中で開会の歌をうたってから、自分自身に向けて説教をするようにと勧めています。マッコンキー長老は、自分が話した説教の中で最も良かったのは、自分自身に向けた説教だったと語っています。

自分の心の中の舞台を、サタンの思うままにさせてはなりません。多くの場合、サタンは私たちが気づかないうちに、心の中に忍び入ってきます。それに気づいたらすぐに、悪い思いを追い出すようにしなければなりません。イエスに倣い、その場できっぱりと誘惑をはねのけてください。サタンの狡猾な説き伏せに逐一耳を傾ける必要はありません。

高潔な思い、貴い思いを心の中に蓄え、それらを意のままに舞台の上に立たせるのは、私たちに与えられた素晴らしい特権です。主も荒野で3つの大きな誘惑を受けたときに、即座に、ご自身の記憶の中に蓄えてあった聖句を引用してサタンにお答えになりました。

### 人生で最も大切な問い

主は「何を念うとも、念々われを見るべし」と言われました。(教義と聖約6：36)これこそ、主に似た者となるための唯一の方法です。

主は弟子たちに、「汝らはいかなる人物にてあるべきか」と問いかけられた後で、みずからこう答えられました。「汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」(IIIニーフアイ27：27)主と同じ人物になるには、常に主を思わなければなりません。私たちは聖餐を受けるときに、「御子を常に忘れぬことを約束します。(モロナイ4：3；5：2；教義と聖約20：77, 79)

私たちはキリストのような人物になることを求められていますが、そのためには、キリストと同じ考えを持たなければなりません。心に思うことが自分自身を形作るからです。

パウロは聖徒を迫害するためにダマスコへ向かう途中、天から光がさすのを見、主のみ声を聞きました。そのときパウロはひとつの簡潔な質問をしました。しかし、「主よ、わたしがどうするのをお望みですか」(欽定訳使徒9：6)というその真摯な問いかけは、彼の人生を変えました。そして、主に向かってこの問いかけをする人は皆、自分の人生を変えることができます。この世に生きる私たちにとって、「主よ、わたしがどうするのをお望みですか」と問いかけることほど大切なことはほかにありません。私は皆さん

に、この問いかけを人生で最も大切なこととして心に留めるよう強く呼びかけたいと思います。

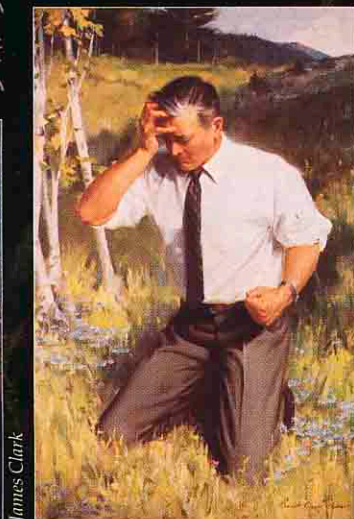
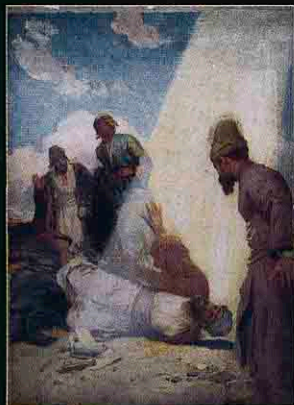
私たちは自分の思いについて、また何に思いを向けるかについて責任があります。私たちはキリストに思いを向け、キリストへの思いを心の中に満たさなければなりません。

キリストについて学び、その歩みに倣うようにとの呼びかけ以上に、心をわきたたせるすばらしいチャレンジはありません。イエス・キリストは私たちの「模範」として地上での生涯を送られました。キリストは天父と私たちの仲保者です。キリストは偉大な贖いの業を成し遂げ、私たちが主の恵みにより、また自分自身の悔い改めと正しい行ないによって、全き喜びを得、昇栄できるようにしてくださいました。キリストはみずからすべてのことを完全な形で成し遂げ、そのうえで私たちにも、天父とご自身と同じように完全な者になるようにと命じておられるのです。(III コーファイ12:48参照)

「イエスならどうされるだろうか」、「イエスは、私に何を望んでおられるのだろうか」と自問するのは非常に大切なことです。主の道を歩むことこそ、人生最高の偉業です。主に近い生活をする人こそ、真の成功を収めた人といえます。

私は主が実在のお方であり、私たちを愛しておられるこ

主よ、わたしが  
どうするのを  
お望みですか



とを知っています。主を離れて成功を収めることはできません。しかし、主と同じ道を歩む人は決して人生につまずくことはありません。

神は、私たちが自分の力でなし得る以上に、私たちの生活を実りあるものにしてくださいます。今より後、皆さんが日々キリストを思い、キリストについて学ばれるように、また勇気をもって主の道を歩み、主に望まれていることを行なうことができますように、イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。□

私たちは  
聖餐を受けるときに  
御子を常に忘れぬことを  
約束します。





## 開拓者の遺産

# すべての 教会員の 受け継ぎ

シドニー・スミス・レイノルス



**私**の友人に、ジョゼという名のスコットランド人の教会員まいつすいがいます。彼の母親はスペイン系の人でしたが、父親は生粋まっすいのスコットランド人でした。ジョゼはスコットランド生まれで、私たちが家族でスコットランドに滞在していたころ、あちこちの古城を案内してくれました。そんなときよく自慢気に、「どうだい、アメリカにはこんなお城はないだろう」と言ったものです。

ジョゼは今アメリカに帰化していますが、スコットランドの歴史上の人物をよく知っていますし、自分も同じスコットランド人の血を引いているのだという強い帰属意識を持っています。スペイン系の母親によく似たその風貌からは、とてもスコットランド人には見えませんが、彼のスコットランド人としての誇りに疑いをさしはさむ人はだれもいません。

ジョゼのように、先祖の地を離れ、文化の異なる異国に移り住んでいる教会員は数多くいます。その地で2世、3世と言われる人もいれば、移り住んでまだ数週間、数カ月という人もいます。多くの人が先祖の地の習慣やものの考え方を守り続けていますが、同時に、新しい地の規範や伝統も取り入れているようです。教会の改宗者の中にも、改宗とは開拓者が残した遺産を自分の一部として取り入れることだということを理解している人がたくさんいます。

現在の大半の教会員は、19世紀にユタへ旅した開拓者たちとは直接的な関係を持っていません。しかし、私たちは初期の開拓者から学ぶことが数多くあります。そのことを否定する末日聖徒はおそらくいないでしょう。質素な生活、シオン建設のための犠牲、どこに住んでも美と平和を作り出すことの大切さなどについて、私たちは開拓者から



教会の改宗者の中にも、  
改宗とは開拓者が残した遺産である  
犠牲の精神、勇気、献身、忍耐を  
取り入れることだと理解している人が  
たくさんいます。

多くの教訓を得ることができます。また大きな困難に立ち向かう勇気、献身、協力、忍耐などについても実に多くの教を学び取ることができます。

初期の聖徒は大平原を進みながら、後に続く兄弟姉妹たちのために地を耕し、種をまき、それを育てました。ブリガム・ヤングはソルトレーク峡谷に到着後、1週間もたたないうちに、ソルトレーク神殿の用地を選びました。神殿建設には40年もの歳月を要しました。そして、ブリガム・ヤング自身は、献堂式が行なわれる何年も前にこの世を去っているのです。神殿建設の現場で働いた人々の中にも「生きて、この宮居の完成を目にすることができたら」と願った人は大勢いたはずで

#### 後の代の人々のために

しかし、彼らは建設中の神殿の中で自分たちがその祝福にあずかれるかどうかは別として、それが最大の努力を傾けるに値する仕事であることを理解していました。そして、ソルトレーク神殿の建設が後々の代の人々のためであり、自分たちが世を去った後に福音を受け入れる人々のためであることをわきまえていました。彼らは私たちのために神殿を建てたのです。この意味において、開拓者が残した大いなる遺産は教会員すべての受け継ぎと言えるでしょう。多くの人は、開拓者たちの話を、ユタへ移住した人々の物語としてだけでなく、福音にまつわる話あるいは全地に神の王国が進展していく経緯を描いた話として受け止めています。教会員の多くは、自分自身が開拓者の立場にいます。すなわち、家族の中で福音を受け入れた最初の人であり、それぞれの地域における王国建設の草分け的存在として働いている人々なのです。

また、自分の先祖の中にユタに移住した人はいなくても、モルモン開拓者に血縁以上の親しみを感じている人もいます。イギリス生まれのローズ・トンプソンもそのひとりです。彼女は、病気だった10歳のころ、様々な困難と戦い抜いた開拓者たちの勇気について考えたことがありました。彼女はこう語っています。「もし自分が大草原を横断した開拓者たちのように、暖かいベッドも医者もない環境に置かれたらどうなっていたかしらと考えました。多分、途中で

死んでしまっていたでしょうね。ですから、この時代に生まれたことにとても感謝しました。そして開拓者たちと同じように、苦しいけれども頑張ろうと決心したのです。」

ローズは結婚後、夫婦でエジンバラへ引っ越しました。そこでふたりはよく、ある年輩の姉妹を訪ねました。その姉妹は長年、扶助協会や若い女性のプログラムで、まさしく「開拓者」として働いてきた人でした。彼女は夫にも、子供にも先立たれていました。

ローズはその老婦人について次のように話しています。「若いときにどんな生活をし、教会でどのようなことをしていたかと聞くと、『しなければならぬことをしただけ』という返事で、特にこれといった経験談は聞けませんでした。でも彼女の『開拓者魂』はよく理解できました。私も子供のことや教会の責任で、経験したことのない問題やむずかしい事柄にぶつかることもあります。そんなときに、『しなければならぬことをする』という彼女の言葉を思い出すと、とても大きな助けになります。」

トム・ラッセルは末日聖徒の女性と結婚した後に教会に改宗しました。彼は開拓者の遺産を「受け継ぐ」ことについて、ローズ姉妹とほとんど同じ考え方をしています。彼自身の先祖は開拓者ではありませんが、彼の妻には開拓者の血が流れています。「妻の曾祖父の母にあたる人は、午前中は畑を耕し、午後はほかの仕事をするという具合に、忙しい生活の中で11人の子供を育てあげました。そして、夜には仕事の出納簿すいとうぼをつけ、ブリガム・ヤング・アカデミーの集会の議事録まで作るという働きぶりでした。彼女は私にとってすばらしい模範です。困難に直面したときにどう生きたらよいかを教えてくれるすばらしい先祖がいたということ、子供たちに知ってほしいですね。」

アメリカで改宗し、今はヨーロッパで事業をしているジェフ・バーガー、シェリー・バーガー夫妻はヨーロッパの末日聖徒の開拓者気質に強く心ひかれるものを感じています。ジェフは初期の聖徒たちに関する靈感あふれる記録を読んで、次のような感想を述べています。「私は開拓者たちの物語を読んだり、聞いたりするのがとても好きです。彼らが様々な苦しみを克服していった物語は実に感動的です。血のつながりがあるかどうかに関係なく、私は彼らを自分自身の先祖のように感じています。」

いずれにしても私たちは  
イエス・キリストの  
福音によって結ばれた  
兄弟、姉妹であり、  
共に神のみ業を進めています。  
そうです、教会員は皆、  
開拓者の遺産を  
受け継いでいるのです。



## 開拓者の信仰に導かれて

エジンバラ・スコットランドステーク部長のリチャード・バン・ハーゲン兄弟は、開拓者のことがきっかけとなってこの教会に改宗しました。彼が教会に関心を持ったそもその始まりは、あるラジオ番組でした。ある日、彼はラジオを聞きながら車を運転していましたが、どうも受信状態が良くなく、ほかの局の番組を聞こうとチューナーのスイッチを押しました。

「1局だけははっきりと聞こえるところがあって、モルモンの開拓者に関する番組を流していました。私はモルモンの開拓者たちの話にすっかり感動し、目的地に着いてからも、ずっとラジオを聞き続けていました。」彼はそれまで教会について何も知りませんでした。この番組を通して教会初期の聖徒たちの信仰と勇気に深く感銘を受けたのです。「その意志の固さには驚かされました。そして本当に彼らを尊敬しました。」ハーゲン兄弟は、そのラジオ番組を聞いたのは決して偶然ではないと考えています。「あんなにすばらしい番組が放送されたなんて、信じられない気持ちになることが今でもときどきありますよ。」数週間後、宣教師が訪ねてきて、そのメッセージを受け入れた彼は、やがてこの教会の会員となりました。

カレン・レイノルズの先祖には、ユタやメキシコに入植した開拓者がいます。彼女は次のように話しています。「7月24日の開拓者記念祭のことはよく覚えています。記念祭の後でメキシコへの旅を題材にした野外劇がありました。その劇は昔の開拓者たちの生活を再現したもので、最後は川沿いの土手に横穴を掘って暮らした人たちの話でした。でもそのときは、自分が両親から教わった、果物の保存法、パンの焼き方、裁縫、手持ちの物で暮らしを立てていく方法などの技術が、後になって役立つようになるなどとは思っていませんでした。」

最近彼女の夫は、病気の父を助けて農場の仕事をするために、良い給料の仕事をやめ、引越さなければならなくなりました。彼女はそのことについて、こう話しています。「自分たちの選択を後悔してはいません。でも、両親から教わった昔ながらの生活技術を実際に試されています。扶助協会のレッスンで学んだ儉約の原則を実験的に試してみ

るといふ程度のことではなく、よくよく考えて予算を立て、買物をしなければなりません。」

彼女が開拓者の伝統から学んだのは、「あるもので生活する」という原則だけではありません。去年彼女は生まれて間もない子供を亡くしました。彼女はそのときの気持ちを、「あの子の体を冷たい墓地に葬ったときには、胸が張り裂けてしまいそうでした」と話しています。その後しばらく、彼女は悲しみに暮れたまま、体の具合も思わしくなく、ベッドに寝たきりの生活が続きました。そんなとき、ワード部のある会員が何冊もの本を彼女のところへ持ってきました。その中の1冊が開拓者たちの苦難の物語をつづった本でした。彼女はそれを読んで感じたことを次のように話しています。「開拓者の中には幼い子供を旅の途中で亡くし、粗末な墓に葬った女性がたくさんいたことを改めて知らされました。私の場合はきちんとした墓地に葬ることができたのです。そこへ行こうと思えば、いつでも行けます。それで自分がどんな恵みを受けているか数えあげてみようと思いました。昔の人たちは信仰をもって前進しました。私にもできると思います。」

私は教会初期の開拓者たちに心から感謝しています。私自身の先祖にも開拓者がいますが、彼らの物語を通して靈感、勇気、祝福を得ることがよくあります。また昔の聖徒たちについての記録を読むたびに、彼らをとても身近に感じます。彼らは、自分たちが進めていた業が、決してロッキーの山間や自分たちの血統の中だけにとどまるものではないと考えていたはずで、末日の開拓者として困難に立ち向かっていくという点で、昔の末日聖徒と現代の私たちには、共通した部分があるのではないのでしょうか。

今、教会には偉大な開拓者の血筋に当たる指導者もいれば、家族の中で最初にこの教会に改宗した指導者もいます。しかし、いずれにしても私たちはイエス・キリストの福音によって結ばれた兄弟、姉妹であり、共に神のみ業を進めています。そうです、教会員は皆、開拓者の遺産を受け継いでいるのです。□

\*シドニー・スミス・レイノルズ：ジョセフ・スミスの兄であるハイラム・スミスの玄孫。オーレム・ユタ・シャロンステーク部オーレム第23ワード部所属。

## 教会の救援事業

# 断食の捧げもの

教会員による献金や特別な断食は、  
困っている人々にとってどのような  
助けになっているだろうか。

アイザック・C・ファーガソン

**イ**チオピア北部の段々になった山腹と形のふぞろいな谷合いは、今ではすっかり干上がり、灰色がっています。かつてここが緑豊かな肥沃な土地であったことは想像すらつきません。雨季に北部へ移動する遊牧民が家畜を放牧していた広大な緑地のなごりとして、わずかに低木が目につく程度です。干ばつのため牧草地には草1本もなくなり、たくさん家畜が死にました。残された放浪者たちは、仕方なく広大な土地を小さな農園と交換したり、国の援助を受けるために手放したりしてきました。水がないために、この国の貴重な表土が失われ、それとともに繁栄への希望、さらには生存の希望さえもが失われてしまったのです。

しかしここエチオピアのウェロ州ゲドバーには希望があります。エチオピアの首都アジスアベバの北方560キロの所にあるこの谷合いでは、干ばつに脅かされながらも、教会が着手した小規模の灌漑事業かんがいが行なわれています。これは教会員の献金を資金とした博愛精神に基づく慈善事業の一環として行なわれているものです。(他の事業に関する詳細は、添付の記事を参照)

1985年、アメリカとカナダの教会員に特別な断食を要請する2通の書簡が大管長会より出されました。その断食によって献金されるお金は「飢饉による犠牲者やそのほかの原因で飢えや貧困に苦しむアフリカの人々およびそのほかの地域の人々のために使われる」ことになっていました。さらに大管長会はこの書簡の中で、「捧げられた基金はすべて……教会員であるなしを問わず飢えや貧困にあえぐ人々を助けるために使われる」と約束しました。援助をしたいと望んだ聖徒たちの献金は、1,100万ドルにも上りました。

1985年の1月に行なわれたこの特別な断食のすぐあとに、教会指導者は、エチオピアや隣接するアフリカ諸国の苦しむ犠牲者たちに食糧やテント、医療物資を配給する事業に協力できる、信頼の置ける団体をいくつか選び出しました。そして、1985年の後半から1986年にかけて、赤十字国際委員会やカトリック救援事業会およびCARE(米国援助物資発送協会)が、教会の用意した救援物資を送り届けてくれました。

### 人々の自立を助ける

しかし、人々の自立を助けるという福祉に対する教会の考え方から、教会幹部たちはそれらの資金の一部を、長期にわたる自立促進のための事業にまわすべきであると決定しました。そこで、献金の一部はゲドバーで行なわれているようなほかのいくつかの事業にまわされています。エチオピア、チャド、ニジェール、カメルーン、ナイジェリア、ガーナなどで行なわれている事業のほとんどは、将来の干ばつに備えた灌漑と農業の促進に重点が置かれています。また1985年11月に行なわれた2度目の特別な断食によって献金されたお金は、現在そのほかのアフリカの地域での事業と、困窮するほかの国々のために使われています。

ゲドバーの事業はアフリケア(ワシントンD.C.に本部を置くボランティア組織)の指示の下に、1985年の半ばに始まり、山から流れ出る水を、1,000エーカーもの谷へ灌漑用水として引くというものです。それは、何百万という人々を飢餓に苦しませ、何十万人もの命を奪った1984年から85年にかけてのアフリカの大干ばつに対処するために教会が着手したものです。

(12ページに続く)

エチオピアにおける灌漑事業の完成は、この事業を後援した人々にとっても、また事業の完成のために大きな努力を払ってきた1,650軒もの農家にとっても、まさに夢の実現と言えるでしょう。この夏に事業が完了すると、農家の人々はこの事業にひとり当たり20万日分以上もの労力を提供したことになります。

ここでは犠牲は珍しいことではありません。山の家から2、3時間も歩いて来て、1日10時間半もの労働をし、また徒歩で帰宅する人もいます。一般の人々は、平均して1カ月に5日から8日間働いています。労働者には報酬として食糧が与えられることになっており、1日の仕事に対し3キロの穀物が支給されています。

建設時間を短縮し、労働力削減のために高度の技術や近代設備を導入することもできましたが、この事業ではあえて現地で手に入る資材や器具を使い、現地人の手による完成を目指しています。それは彼らに自立心を養わせ、自分たちのものを自分たちで作りあげたという誇りを持たせるためです。この方法はまた、事業費を安く抑えるのにも役立ちました。

結果的には、24キロにわたる運河を掘り、川上に水路変更用ダムを建設するための用地整理のほとんどを現地の人々が行ないました。また、この設備は、現地の人々が楽に維持していけるよう、簡単な技術が取り入れられています。

### 長期にわたる自立を目指して

エチオピア政府は、谷に蓄えられた水を年間を通していつでも使えることの価値をすぐ認識し、この事業を手本として、ほかの慈善事業機関にも協力を要請しています。政府のある指導者はこう語っています。「これは非常に重要な事業です。ぜひほかの方々にも、このような事業を行っていただきたいと思います。この事業は、長期にわたる人々の自立を図るものです。今までの2倍も3倍も生産を増やせるようになりますし、地元住民の労働力を活用し、低い

コストの技術を使った点で大成功です。」

エチオピアの農務大臣は、近くに乳製品の共同組合を開くために資金を提供するなどして、この事業に対する自信のほどを見せています。すでに乳牛などの家畜を飼い始めました。農民たちもまた熱意をもってこの事業にあたっています。このダムが完成しないうちに仮の水路が掘られ、40エーカーもの土地に水が供給されました。農民たちはすぐにパパイヤ、グアバ、バナナ園などをはじめ、いろいろな野菜畑を作るために土地を耕しました。以前なら、野菜の成育期の水不足を恐れてこのような危険はあえて冒さなかったでしょう。

七十人第二定員会の会員であり、英国、アフリカ、アイルランド地域の地域会長会の一員であるアレクサンダー・B・モリソン長老は、この事業についてこう語っています。「基本的に、この計画は、食糧に関する限り3つの村に住む1万人の将来の生活を保証するものです。さらに、子孫代々にわたり、たとえ雨が降らなくても自分たちの必要とする食糧をかつてないほど大量に、また種類も豊富に栽培できるのです。」世界中の団体が、今年もまた大量の食糧援助を呼びかけていますが、季節を問わず長期にわたって水を供給するという教会の事業は、一時的な食糧援助よりもずっと意義深いものです。

### 危機にあたって

貧困にあえぐ人々を援助する新しい方法として、1985年に全教会的な規模で断食が行なわれましたが、教会はこれまでも常に危機に瀕した人々に援助の手を差し伸べてきました。第二次世界大戦後には、戦争で傷ついたヨーロッパの市民に何トンもの食糧や衣服、医薬品を送りました。その人たちの多くは会員ではありませんでした。また1954年に、教会はユタ州の合同教会イオニア人救済運動に加わり、ギリシャの貧困者に援助を与えました。その寄贈物資の大半は、福祉プログラムの倉庫から出したものです。また1906年には、飢饉に苦しむ中国人を助けるために、扶助協会の  
(16ページに続く)

アンデス児童財団が後援する養魚池の開発事業。村人たちは池を掘ってきれいな水を引き、周囲を岩で囲み、魚を育てている。魚は市場価値があり、人々の蛋白源にもなる。

ソラソラ村の養魚池を見た隣のシベンベ村の住民が、自分たちも池を掘り、水を引いた後、技術的な助言と魚を求めて財団へやって来た。

写真撮影 — アイザック・C・ファーガソン



## ボリビアの山地における 地域開発

地域の人々が何を必要としているか、その必要を満たすにはどんな事業を計画したらよいかを話し合う村人たち。



写真撮影 — アンデス児童財団

**教** 会は最近、ボリビア山地の住人に地域開発を促す「アンデス児童財団」に加入しました。この事業では、まず開発の専門家たちが地域の指導者と会い、村にどんなものが必要かを話し合います。そして、地域の指導者たちが、村人たちの必要を満たすための事業を企画するのを援助します。また「アンデス児童財団」では、こうした事業を推し進めるために必要な技術を身につける援助も行ないます。

このようにして、住民たちは自分たちの必要について十分考慮し、地域社会を改善するために協力して働くことを学びます。また自分たちの力で成し遂げた喜びを味わい、さらに今後も開発を続ける自信を持つようになるのです。

たとえば、ソラソラ村の指導者たちは、もつ

と作物の収穫が上がるよう農業のやり方を改善したいと望みました。財団はさっそく低いコストで次のような事業の企画を援助しました。井戸掘りや水をくみ上げるための風車の設置、くみ上げた水をためておく貯水槽作り、灌漑用水を引くための運河掘り、アンデス高地の寒さに弱い野菜のための温室作りなどです。村人たちはこれらの設備を作り、現在自分たちでその管理にあたっています。こうした地域単位の事業の成果を目にして、人々は自分たちの農場にもそうした方法を取り入れ始めました。

目下、村は財団の援助を得て、学校の建設、地域の保健衛生担当者の訓練、新しい食糧源の開発などの事業に取り組んでいます。□

---

# アジア 難民のための 職業訓練と 雇用推進

19 75年以来、大勢のアジアの難民がアメリカにやって来て新しい生活を始めようとしています。しかし言葉の問題や文化の違いのために、また職業技術が不十分なために、失業率や不完全就業率は依然として高いままです。

教会は、北アメリカ西部地域会長会とカリフォルニアの福祉事業部と協力し、末日聖徒のアジア難民と会員ではない友人たちが言葉や職業技術を磨き、適当な仕事につけるように援助を与えています。地元ステーキ部のボランティアたちは、オリエンテーションセミナーを開いたり、英語のレッスンをしたり、ホテルの清掃係やカーペット敷き、基本的なコンピュータ操作などの職業技術を教えたりしています。また難民たちに、就職の際の面接の受け方や好ましい服装、健康を守るための基本原則、アメリカの労働水準などについて教えています。

こうしたステーキ部では、集団訓練の機会を提供するだけでなく、有力な雇用者を見つけるよう教会の雇用体制と調整を図っています。□



左……防風林で保護された畑でキビを収穫するニジェールの農夫たち。この防風林はCAREの後援と、一部は教会員の献金により進められている再植林事業の一環である。この事業のおかげで、風による表土の浸蝕を食い止め、農作物を30パーセント増産することができるようになった。

写真撮影 CARE

右……ニジェールのマジア盆地。農地に約90メートル間隔で2本ずつ1列に木が植えられている。この防風林は農作物を保護し、風化による表土の浸蝕を食い止める働きをしている。

写真撮影 CARE

木の伐採は、建築資材や燃料用の木材にするために交互に行なわれる。

成育した1本の木から枝を切り落とし、新しい枝が伸びてくるように幹を2.5メートルほど残しておく。新しい枝が農作物を保護できるほど十分成長したとき、もう1本の木から枝を切り落とす。

写真撮影——アイザック・C・ファーガソン



## ニジェールにおける 農林開発

**ア**フリカのサハラ砂漠の下方に位置するニジェールは、深刻な飢饉と干ばつに見舞われています。もとは農耕地でしたが、かなりの表土が風に吹き飛ばされてしまっているのです。

1985年に行なわれた特別な断食による教会員の献金は、CAREの指示でニジェール西部のマジア盆地に託児所を開くための資金として使われました。ここの村人たちは、防風林の苗木を育てる仕事をしています。苗木が大きくなると、

村の小さな農場に移され、肥沃な土を吹き飛ばす風から農作物を守るのです。この方法が取り入れられてから、農作物の収穫は30パーセントも増えました。

この農林開発事業は、長期にわたる成功を目指し、ニジェールの森林事業部と一体となって進められています。この計画は、アフリカのサハラ砂漠の下方地域においては、最も大きな成功例のひとつです。□



穀物貯蔵庫から麦が送られました。こうして過去20年間、教会は危機に瀕した世界中の人々に、幾度となく援助を与え続けてきました。

主は困っている人々に援助を与えることに関し、教会に対して次のようにはっきりと勧告しています。

「すべての人に対して……汝の腹中を慈愛にあふれしむべし。」(教義と聖約121:45) アルマ書の1章にあるように、ニーファイの民はこの原則に添った生活をしていました。「各々みなその財産の多い少いに応じて、貧乏な者や病気にかかっている者や苦しんでいる者たちに施しをした。……そして、このように栄えていたとき、かれらは着る物のない者、飢えている者、渴いている者、病気をしている者、栄養の足らない者などを追い払わず……教会員であると非教会員であるとの差別なく誰にも同じように惜しまず物を施した。」(アルマ1:27, 30)

苦しみには地理的にも政治的にも国境はありません。教会が行なっている人道的な援助は、宗教や政治形態に関係なく、同胞に対する私たちの義務のひとつです。管理監督会の第二副監督を務めるグレン・L・ペイス監督は、エチオピアを訪れたときの報告書にこのように記しています。

「我々の送った物資は、現地の政情とは関係なく、たくさんの人々に役立っています。十二使徒評議員会会員のM・ラッセル・バラード長老と私が現地を訪れたときに会ったのは、共産主義者でもマルクス主義者でも、また資本主義者でもありませんでした。そこにいたのは飢えた人たちであり、皆、神の息子娘でした。」物質的な援助を与えることからさらに一歩進んで、「あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、およびあらゆる人々」(モーサヤ15:28 参照)に福音を宣べ伝えるにつれて、イエス・キリストの福音は人間の作った境界を超越するものであることがよく理解できることでしょう。

### 自分の時間や才能を提供する

一般的に言って、教会が後援する人道的な事業は、次の

ような場合に限られています。

(1)自然災害などにより、人命を脅かし、即座に救助を必要とする重大な緊急事態が発生した場合。

(2)貧困や病気、危険な環境などが慢性的に続いており、自立心を向上させることによって改善可能な場合。こうした事業の資金は、その目的で捧げられる会員の献金によってのみ賄われます。

しかし、一組織としての教会も、これらすべての必要とされる援助を行なうのには限界があります。そこで指導者たちは、会員が市民としてそれぞれの地域で信頼性の高い人道的な事業に積極的に参加するよう勧めています。現金や物品を提供するだけにとどまらず、可能な場合は事業のために時間や才能をも捧げるとよいでしょう。自分の持っている技術を提供したいと考えている教会員もたくさんいるはずで、地域社会は、教会員が提供できるこうした様々な奉仕を求めています。さらに、教会は世界中で苦しむ人々を助けるために、専門機関と協力しています。こうして、私たちが奉仕する機会はずっと増えています。

最近の例としては、デューイ・ピーターセン兄弟とパトリシア姉妹が自発的に数カ月間の奉仕を申し出、ナイジェリアで器材を設置し、現地の人々に井戸の掘り方を教えました。ユタ州バウンテフル出身のピーターセン夫妻は、教会が後援する救済事業であるアフリケアのボランティアとして働いています。営利を目的としない私設の組織では、こうした教会員の積極的な協力を求めています。

教会は私たちに、愛の奉仕を無条件に行なうという模範を示しています。私たちは一人一人教会員として、報酬を期待することなく、人々に奉仕の業を続けていかなければなりません。みずから進んで人々に仕え、助けを与えるときに、私たちは福音が教えるキリストのような精神を持つことができるのです。□

\*アイザック・C・ファーガソン：教会福祉事業部の一員。教会救済事業小委員会幹部書記。ユタ州バウンテフル、ミューラーパークステーキ部所属。



1,000エーカーもの谷へ灌漑用水を引く事業の一環として運河を掘る、エチオピアのウエロ州ゲドバーの農民たち。運河や水路変更用ダムは、住民自身が地元で手に入る資材や器具を使って建設したものであり、誇りをもって管理にあたっている。

完成したダムのおかげで、一年中谷へ水を送ることができ、これまで栽培することが不可能だった果実や野菜を植えることができるようになった。



写真撮影 — アイザック・C・ファーガソン

# ブリガム。

**ブ**リガム・ヤングといえば、30年間にわたって教会の発展を管理した人物、聖徒たちをソルトレーク盆地に導いた人物、米国西部の多くの市町村の開拓を指導した人物を思い浮かべます。以下の記事は、改宗者ブリガム・ヤングの若いころと、彼がどのような経験を通して偉大な指導者となっていったか、その概略を説明したものです。

1800年当時、ブリガムの父ジョン・ヤングは、妻と8人の子供と共に、マサチューセッツ州ホプキントンに住んでいました。そのころジョンは、バーモント州ホワイティンガムに住むいとこから1通の手紙を受け取りました。当地に安い土地があるので、購入して家を構えてはどうかというものでした。その年の後半、ジョンは妻子をホワイティンガムに転居させました。1801年6月1日、ブリガム・ヤングはそこで生まれたのです。

1802年、ヤング一家はニューヨーク州のシャーパーンに移り、そこで4年間を暮らしました。さらにふたりの子供が生まれ、子供は全部で11人となりましたが、その中のひとり、娘のナビーが死亡しました。

それから数年間、一家はあちこちへ転々としました。男たちは休むことなく新開地を切り開きました。常にもっと良い土地がほかにあるように思われた時代だったのです。金銭上の必要に加えて、性格的にもじっとしていられないたちだったジョンは、一区画の地所を買い、木を切り倒し、土地を開拓してはまたさらに良い地へと移って行くのでした。しかし、ジョンはひとりではありませんでした。大抵何人かの兄弟姉妹とその家族が共に周辺の土地に移り、しばらくの間居を定め、再び新しくやり直したのです。

ブリガムの家は決して豊かではありませんでした。靴ですらぜいたく品と見なされていました。あるとき、思いがけずブリガムは1足の靴を手に入れましたが、素足に慣れていたので、特別なときのためにしまっておきました。教会へ行くときも、集会所の近くまで靴を持っていき、集会の間だけはいて、集会が終わると脱ぐのでした。

ブリガム・ヤングが受けた正式の学校教育は、巡回教師から教えを受けたわずか11日間だけでした。しかし母親から読み方を教わりました。また、生まれつき研究心が旺盛で、周囲の出来事や周りの世界を鋭く観察しました。14歳

のとき、母のナビー・ハウ・ヤングが結核で死亡しました。それからは大工、家具師、塗装工、ガラス工などの技術を身につけるために見習いとして雇われましたが、これらの技術は、後に都市を建設することになったときすぐに役立ちました。

## 独立

1817年、16歳になったブリガムは、父の許しを得て自活を始めました。そして、一生懸命に働き、丹念に仕事をする、腕のいい職人となりました。ブリガムの作ったいすは今でも残っています。仕事を捜しにポートバイロンに移り住み、そこでミリアム・ワークスと知り合いました。ふたりは1824年10月5日に結婚し、ふたりの子供が生まれました。

一方、父のジョン・ヤングとブリガムの兄弟たちは、ニューヨーク州メンドンに移り住みました。メンドンに来て共に暮らすように何度も言われ、1828年、ブリガムはとうとうメンドンに移りました。そこでヒーバー・C・キンボールとパイレート姉妹に出会い、ふたりと終生の親交を結ぶことになるのです。

メンドンで、メソジストの巡回牧師をしていた兄のフィニアス・ハウ・ヤングが、たまたま同じメソジスト教徒のトムリンソンという人物の家に立ち寄ったところ、先客の青年がフィニアスにこう言いました。「ぜひあなたに読んでいただきたい本があります。」

「ほう、どんな本ですか。」フィニアスは尋ねました。

「モルモン経と呼ばれている、神からの啓示が書かれている書物です。」

地元でそのような本のうわさがあることを知っていたフィニアスは言いました。「ほう、黄金の聖書ですか。」

「そう呼ぶ人もいます」と青年は答え、続けてこう言いました。「証人

# ヤング

## その 若き日々

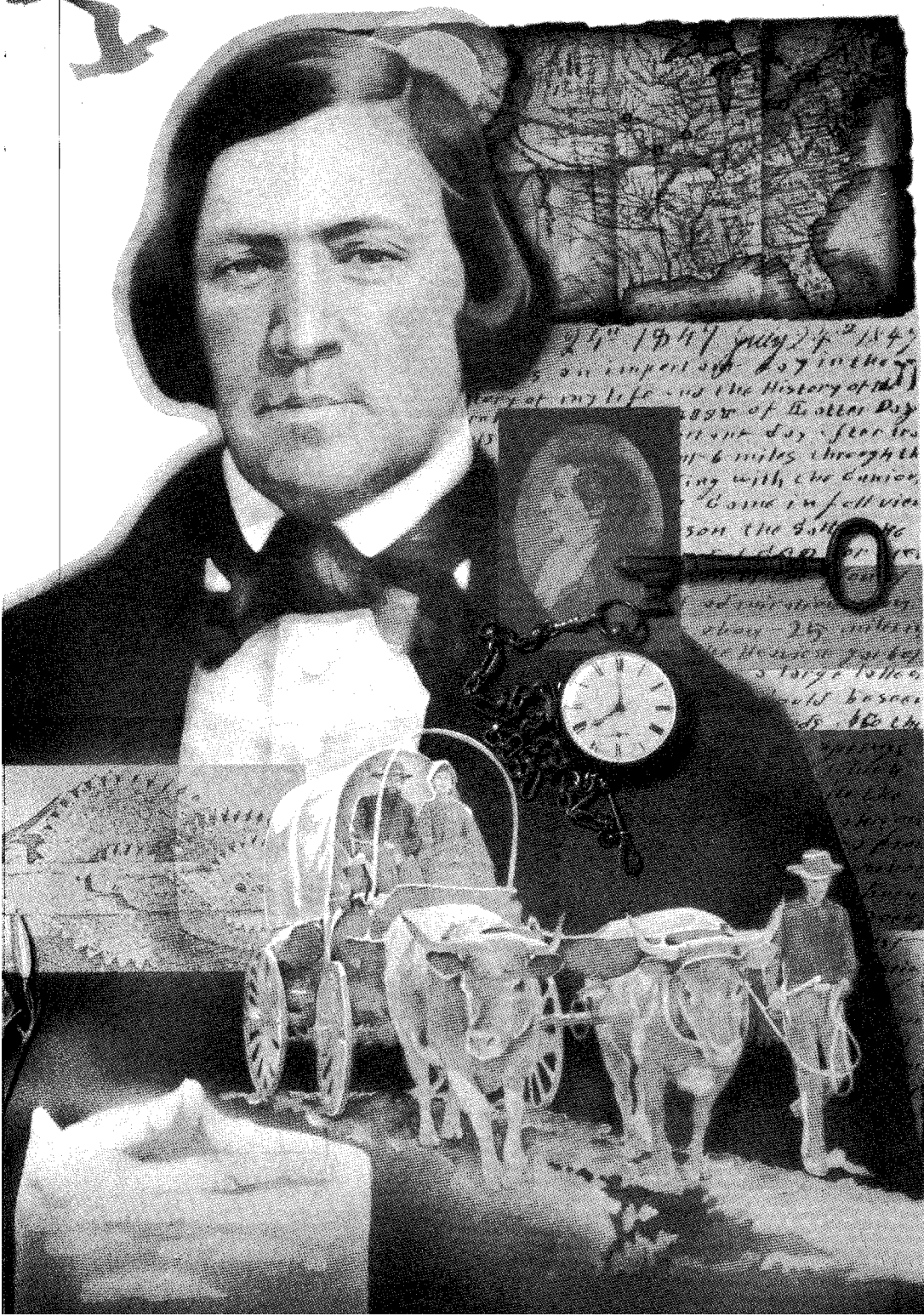
### ツグミのシチューと砂糖の夕食

ある冬、ヤング一家はとりわけ厳しい冬を過ごし、3月の初めには食糧がなくなっていました。ジョンは上のふたりの男の子、フィニアスとジョセフを食料や穀物、そのほか何にでも交換してくれる仕事を探しに行かせましたが、ブリガムとロレンソは自分と一緒に小屋に残しました。

ジョン・ヤングは農場のカエデの木の樹液をとり、それを煮つめてカエデ糖を作りました。そしていよいよ食糧が底をつく、ジョンはつくった砂糖を食糧と交換しに行くつもりだと、ブリガムに言いました。「いいかいブリギー、お前はここにいるんだよ。明日の朝になったら外へ行って、一日仕事をしなさい。やぶを切り払い、できるだけ木を切っておきなさい。ロレンソ、お前はしばを積み上げておきなさい。父さんは行って帰ってくるのに明日いつばいかわかるけど、あさってには帰るからね。」翌朝早く、ふたりの幼い男の子がかるうじて飢えをしのぐことのできる300グラムほどの砂糖を残すと、ジョンは雪靴をはき、荷物を背負って家を出ていきました。

ブリガムとロレンソは、父親と約束したとおり終日働いて、夕方4時ごろ帰途につきました。ふたりが歩いていると、ツグミの鳴く声が聞こえてきました。そこで、足を止めて辺りを見回すと、4、50メートル先の低い木にとまってい

(24ページに続く)



たちの証を読んでいただきたいのです。」

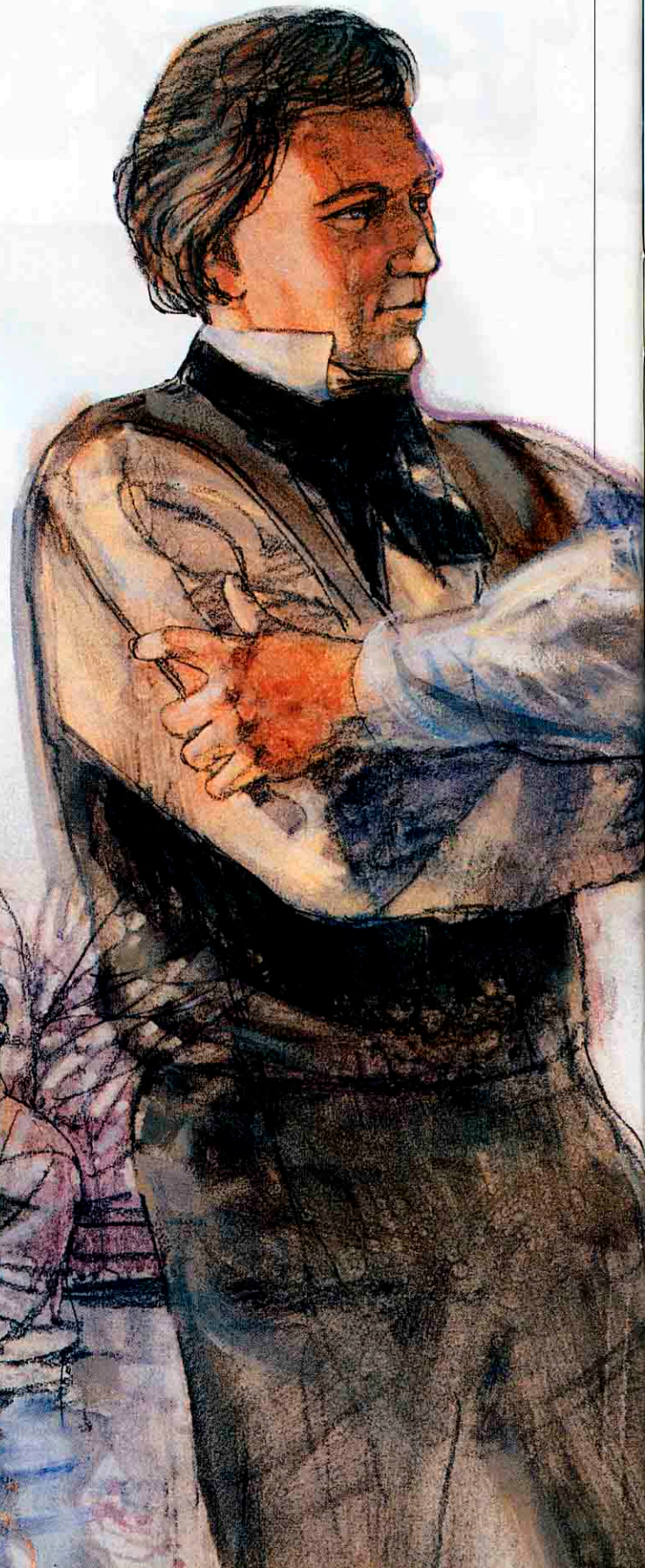
フィニアスは3人の見証者の証言を読みました。それは、神の力によってモルモン経が翻訳される原本となった版を見たこと、翻訳が正確なものであることを神のみ声が告げるのを聞いたという証言でした。彼はまた8人の見証者の証言も読みました。8人はその版を見、手で触れたことを証言し、その版は古代の珍しい手法で作ったものであると述べていました。

フィニアスは誤りを暴くつもりでモルモン経を1冊買いました。ところが読んでみると、真実であることがわかったのです。フィニアスはそのことを父をはじめ、ブリガムやほかの家族に話しました。モルモン経を読んだ家族も、その書物が真実であることを認めました。

その夏、5人の若い末日聖徒が、ジョセフ・スミスとモルモン経について人々に教えるためにその地域を訪れました。フィニアスは喜んで彼らを家に迎え入れました。彼の家には、ヤング一家とキンボール一家も訪問者の話を聞きに来ていたのです。

## 重大な決断

2年間にわたってこの教会を研究した後、ブリガムは近くの森の中を流れる小川でバプテスマを受けました。それは、1832年4月のとても寒い日のことでした。儀式に参加した人々は、降りしきる激しい雪のためにほとんど何も見





えませんでした。丸太に腰かけ、ぬれた衣服に凍えながらブリガムは教会員に確認され、長老に聖任されました。後に彼は、「そこに座していると、『汝の罪は赦された』と証言する聖霊の麗しいみたまを感じた」と語っています。妻のミリアムも1週間後にバプテスマを受けました。ところが、そのわずか数カ月後にミリアムが結核で死亡したのです。ミリアムの死後、ふたりの娘、エリザベスとバイレートはキンボール家に引き取られました。

1832年の秋、ブリガムと兄のジョセフ、ヒーバー・C・キンボールの3人は、560キロを旅してオハイオ州カートランドへ行き、予言者ジョセフに会いました。ブリガムは予言者と握手を交わしたとき、心の中で「確かにこの人は予言者だ」と思いました。その日からブリガムはジョセフ・スミスのために生涯を捧げ、できる限り予言者と行動を共にしたのです。

メンドンに戻ったブリガムと兄ジョセフは、11月の末か12月の初めに家を出て、泥と雪、寒さと風の中を歩き回って福音を宣べ伝えました。多くの人々が心を開いて、ふたりの言葉に耳を傾けてくれました。



春が来るとすぐ、ブリガムは今度はひとりで伝道に出かけました。以前兄とふたりで教えを説いたことのあるカナダのラブバフに行き、改宗者の一行と落ち合い、一行を960キロ離れたカートランドまで導きました。それから歩いてメンドンに帰ったのです。

1833年の秋、ブリガムとキンボール兄弟は各自の地所を売り払い、予言者がいるカートランドに移りました。ふたりがカートランドに到着すると、多くの男たちが冬の出稼ぎにクリーブランドに行くところでした。しかしブリガムはこう言いました。「私は行かない。予言者のもとにいたために来たのだから、私はここに残るつもりだ。」カートランドには仕事の口があまりありませんでしたが、ときにはいくらかの大工仕事をしました。

しかし何をしていても、予言者が人々に説教をしたり、話し合いをするときにはいつでも、ブリガムは大工道具を置いて聞きに行きました。予言者の話を聞き逃すことは決してなかったのです。

1834年、ブリガムはメアリー・アン・エンジェルと結婚しました。メアリーは先妻のふたりの娘を育てるかたわら、6人の子供をもうけました。下のふたりの男の子は後に教会幹部、すなわちブリガム Jr.は十二使徒定員会会長、ジョン・Wは父の第一副管長を務めました。

## 試練の時

その同じ年(1834年)、ミズーリ州ジャクソン郡に住む末日聖徒たちは、暴徒の迫害を受けていました。予言者はシオンの陣営部隊(200人の義勇兵から成る小さな軍)を組織して、聖徒たちの救助に向かいました。ブリガムと兄のジョセフもその陣営に加わりました。しかし、ミズーリ州政府に聖徒たちの要求を認めてもらおうとする試みは成功せず、予言者は義勇兵を解散してカートランドに送り返しました。1,600キロにも及ぶ長く過酷な行軍を通して、人々はいろいろなことを学び、信仰と従順を試されました。ジョセフ・ヤングは後に、こんなに厳しい信仰の試しは経験したことがないと語っています。

予言者に献身したブリガムは、幾度も予言者を擁護することになりました。教会の指導者の中に背教が起こり、予言者に反対する者が出たときにも、ブリガムはほかの忠実な兄弟たちと同様、心を揺るがすことはありませんでした。背教した暴徒がジョセフを待ち伏せて殺そうと謀ったことが何度かありましたが、そのときにもブリガムは予言者の命を守るためにあらゆる手を尽くしたのです。

この試しの日々を通して、ブリガムは将来教会の

指導者となるのにふさわしい資質を培ってきました。たとえば、聖徒たちがミズーリ州ファーウエストから追われたときのことです。彼は兄弟たちの所に行き、所持品をすべて質に入れるように頼みました。そして次のように言ったのです。「そうしてくれたら、何もなく、自分の力では行けない聖徒たちと一緒に連れて行くことができる。共にファーウエストを出たいと願っている教会員をひとりとして置き去りにしたくはない。」すばらしいことに、ブリガムの呼びかけに人々は皆従いました。貧しい人々でさえ、金や家畜、馬車などの共有財産をすべて抵当に入れて、さらに貧しい聖徒たちを援助したのです。

ブリガムは組織的に聖徒たちを援助したばかりでなく、みずから奉仕の模範を示しました。まず、自分の妻とパイレート・キンボール、その子供たちを馬車に乗せ、ファーウエストから30キロ離れたイリノイ州クインシーまで運び



ました。そして馬車から荷を降ろし、妻子のためにテントを設営し、数日分のまきを切って用意すると、また馬車を駆ってファーウエストに引き返し、別の家族を連れ出しました。それからその家族が野宿している間に、自分の家族とキンボール家の人々をさらに30キロ先まで運び、また引き返して2番目の家族を同じ経路で運びました。そのようにして、自分の家族とキンボール家の人々だけでなく、馬車を持っていない貧しい人々を移動させたのです。ほかの兄弟たちも同様の行動を取り、その結果、すべての聖徒がファーウエストを離れることができました。

ブリガムとキンボール兄弟は英国への伝道に召されていたものの、ひとつの問題がありました。ふたりは、ファーウエスト神殿のすみ石から伝道に出発すると主に約束していたのです。そこで、背教者に命をねらわれる恐れがあったにもかかわらず、ブリガム、オルソン・プラット、ジョン・E・ページ、ジョン・テイラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ジョージ・A・スミスらの一行は、ファーウエスト神殿の敷地に戻り、数人の忠実な聖徒たちと共に短い礼拝を行なったのです。それから使徒たちはイリノイ州のコマス（現在のノーヴー）へ行って家族を住まわせ、伝道の準備をしました。ブリガムは、モンローズのミシシッピ川の対岸にあった軍の兵舎に自分の家族の部屋を確保しました。

## 苦難に満ちた伝道の開始

使徒たちがいざ伝道に出かけるといえるとき、ブリガムは重い病で立ち上がることもできなくなってしまいました。生まれたばかりの赤ん坊を抱える妻も、子供たちも病気でした。しかし、主への約束を果たし、何としても伝道に出ようとしたブリガムは、はうようにして家から出ると、ふらふらしながら馬車に乗りました。苦痛をこらえながら川岸まで行き、川を渡ったところでその場に倒れ、長い間地面に横になっていました。そこへ馬に乗った人が通りかかり、キンボール家まで運んでくれました。着いてみるとヒーバーもまた病気にかかっていた。ふたりは1週間か2週間床に就いたあと、やっとのことで心を奮い立たせ、主の業に出かけることにしました。ベッドから起き上がり、町を出るために馬車の手配を済ませたふたりは、こうして妻たちに別れを告げたのです。（メアリー・アンも、ブリガムの看病をしに川を渡ってきていました）ふたりは病気で体が衰弱していたために、よじ登るようにして馬車に乗り込むと横になりました。キンボール兄弟はブリガムにこう言いました。「こんな姿で妻子と別れるのはやめましょう。」

ふたりはよろけながらも立ち上がると、帽子を振りながら「万歳！ 万歳！ シオン万歳！」と叫びました。そして馬車の床に崩れ落ちたのです。

それから数カ月かかって、ふたりはニューヨークに着きました。ブリガムの服はボロボロでした。体を暖めるには、着古したキルトをひもで体に巻きつけるしか方法がありませんでした。

1840年の2月までには出港するつもりでしたが、一銭のお金もなかったため、ブリガムは地元の聖徒たちに訴えました。「私たちは無一文でこんな遠くまでやって来ました。これからイングランドに発たなければなりません、まさかこの大海を泳いで渡ることはできません。」会員たちがブリガムのために集めてくれたお金は、19ドル50セントになりました。大西洋の渡航費はちょうど19ドルでした。

ふたりは3月に、イングランドのリバプールに向けて船出しました。1カ月の長い船旅は、ブリガムにとってとてもつらい旅でした。航海中ずっと船酔いに悩まされ、食事をとることもできませんでした。あまりにやせてしまっていたので、リバプールの埠頭に出迎えたいとこのウイラード・リチャーズにも、ブリガムだということがわからないほどでした。

翌年、ブリガムとその一行は、英国において目覚ましい伝道活動を展開しました。5,000冊のモルモン経と3,000冊の賛美歌を印刷し、英国版の教会雑誌「ミレニアルスター」を発刊し、およそ8,000人の人々を教会に導いたのです。

この伝道中に様々な経験を積んだブリガムは、予言者が殉教したときには教会の指導者となる備えができていました。大管長となってからは、聖徒たちをソルトレーク盆地に導き、教会に安定と発展をもたらしたのです。

1877年8月29日、ブリガムは腹膜炎のためにソルトレークシティで死亡しました。臨終の床で彼の目は、部屋の天井に向けられ、遠くの隅にいる人物にじっと注がれているようでした。そしてこう言ったのです。「ジョセフ！ ジョセフ！ ジョセフ！」

若いころから福音の原則に専心したブリガムは、偉大な予言者にして指導者となることができました。その人生の目標は、主のみこころを知り、それを実行することでした。□

\*この記事は、ヤング長老（1897-1981）がブリガム・ヤング大学で行なった講演に基づくものである。ヤング長老は、ブリガム・ヤング大管長の曾孫にあたり、七十人第一定員会会員を務めた。





(19ページより)

るツグミを見つけました。ブリガムはロレンゾに言いました。「いいかい、よく見張ってるんだよ。ひとつ走り行って銃を持ってくるから。夕飯が食べられるんだ。」そしてぐるっと回り道をして家まで帰り、銃を手にして走って戻って来ました。

銃は7キロほどの重さがあつたに違いありません。それでもブリガムは何とかねらいをつけ、引き金を引きました。ふたりは走って行ってツグミを拾うと、羽をはいてきれい

にし、家に持って帰りました。そして、なべにツグミの肉と水を少し入れて火にかけ、料理し始めました。粉を入れる樽を傾けて底の方をたたき、残っていた粉を集めると、どうにかコップ半分ほどありました。ふたりはそれでシチューにとろみをつけ、ツグミのシチューと砂糖の夕食を食べたのです。翌日の夜、父親が穀物と肉を少し持って帰ってきました。こうして親子3人は生き延びることができたのです。

# 滝川支部

## わがシオン滝川支部



支部長  
本間吉雄



テレビドラマ「チョッちゃん」でその名が知られた滝川市は、札幌から旭川へ向かって車で約2時間の所にあります。その滝川市のちょうど真ん中あたりに、現在約20名が集う滝川支部があります。

教会は今から十数年前に旭川地方部滝川伝道所として開設されました。古い民家の1階を集会場に、2階（といってもどちらかと言えば屋根裏部屋といった所）を宣教師のアパートとして、壁の崩れかけた所にごぎを敷いて使っていました。

それから2カ所ほど転々として、約5年前に現在の場所に移転しました。以前会社の事務所が入っていた建物の2階を集会場として使用しています。

支部では、昨年4月から2カ月に1冊の割合で機関誌「昇栄」を発行しています。その中には、各組織の連絡事項や、証、また支部の歴史なども載せ、会員の信仰を深め、お互いの親睦を図っています。

バプテスマを受けることを両親から反対されていた、ある学生の求道者の姉妹がいました。この姉妹は、「昇栄」に載せられた身近な人の証を読んで励まされ、両親を説得し、ついにバプテスマを受けることができました。

扶助協会では、数年ほど前からホームメイキングの活動でふきんとぞうきんを作り、毎年暮れに地元の老人ホームに贈っています。また、ある精薄者の施設にも定期的に訪問をしています。昨年の支部のクリスマス会には、施設の園長さんと先生が手作りのハムを持ってきてくださるなど、地域の

人々との交流も深めています。

今後、さらに地域社会に貢献していきけるよう、また借り住まいではなく、早く独自の集会場を持ち、この地に住む多くの方が集まれるよう、全員で力を合わせて頑張っています。

この滝川の地に真のシオンが建てられることを、心から願ってやみません。そのためにも、さらに聖典を学び、みたまの導きと指導者の教えに謙遜に従うことにより、福音を日々の実践の場に現わすことができるよう努めていきたいと思っています。（ほんま・よしお 1956年生まれ）

## 編集室から

### 《原稿を募集しています》

▶各地のたよりの原稿を常時募集しています。改宗談や日々の信仰生活で得た証（仕事にかかわる証など）、本誌を読まれての感

想文（「読者のひろば」）やカットなどをお送りください。また、北は北海道から南は沖縄までの幅広い話題を取りあげたく思いますので、広報ディレクターあるいは各種催し物を担当する高等評議員/地方部評議員の方はレポーターを手配して下さるようお願いいたします。

投稿には必ず連絡先（電話番号）と教会での責任（役職名）、生年月日を記入してく

ださい。お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。▶あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03(444)5264

## 家族と共に



遠藤 功

ある日、仕事の打ち合わせのときに、相手の方からコーヒーを勧められました。失礼のないように丁寧に断わりすると、「息子さんと同じように教会の関係で飲まないんですね」と言われ、びっくりしました。その方は長男の友人の父親だったのです。息子が教会の戒めをきちんと説明

してくれていたことを知り、うれしく思いました。また、息子も同様の誘惑を何度も受け、そのような経験を積み重ねながらも信仰を保ち続けてきたに違いないと思いました。

建具業を自営している私にとっては、毎日がまるで時間との戦いです。けれども、家族の協力のおかげで安息日には教会へ行くことができます。また、担当ユニットへの訪問や片道2時間ほどかかるステーク部での神権役員会のときなどは、妻に運転してもらい、私は車中で疲れた体を休めます。このとき、子供たちに安心して留守を任せられるのも、祝福のひとつです。

車中、私が妻に「すまんな」と言うと、

妻は、「きっと、これが夫を支持することなのよね」と言ってくれます。そんなとき、教義と聖約25章5節の、「汝の有つ天職の任めは、汝の夫……を、苦難の時に慰めの言葉を以て優しく心にていたわるためにあり」との聖句が思い出されます。ジョセフ・スミスもこのように、妻であるエマ・スミスに助けられたのではないのでしょうか。このように、さりげない言葉によって互いに平安な温かい気持ちを感じることができ

ます。  
この小さい家族にも神の愛が注がれていることを心から感謝します。(えんどう・いさお 1945年生まれ、大祭司グループリーダー)

## 初めての結婚祝賀会



原田 義行

1987年9月23日、我が滝川支部で初めての結婚祝賀会が行なわれました。新郎の原田幸治郎兄弟と新婦の葛西幸子姉妹はふたりとも帰還宣教師で、弘前支部で出会いました。子供のころからのなつかしい滝川支部で祝賀会をしたいという新郎の希望で、このたびの会が計画されました。

しかし、このような小さな支部で結婚祝賀会という大きなことがはたしてできるだろうかとの不安な気持ちが、会員たちの心にはわいてきました。そんなとき、支部長の「大変でしょうがやりましょう」という力強い言葉に励まされ、さっそく準備を進めることになりました。もちろん発起人は教会員全員です。

教会では小さすぎるので、公民館で行なうことになりました。教会の標準に従って会場は禁酒禁煙とし、飲み物はジュース、サイダー、料理は教会員の手作り、会費は無料と決まりました。出席の返事が連日、支部長宅に届きました。しかし教会員以外の出席者から、「今どき会費無料で酒なし、しかも公民館で手作りパーティーなんて、

本当にできるのか」とか、「いったいどんなことをするんだ」といった、戸惑いや問い合わせの電話もどんどんかかってきます。200人以上もの出席者によってホテルなどで豪華に行なわれる一般の結婚披露宴と比較してみれば、確かにそのとおりです。会場である公民館も今では葬祭に使われることがほとんどです。でも館長さんは、公民館ができて初めての結婚祝賀会ということで、喜んで協力してくれました。

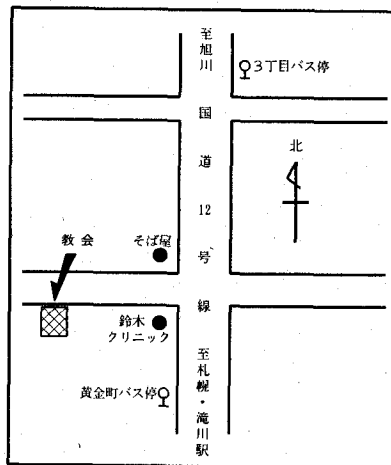
支部長の陣頭指揮の下に、料理の搬入、会場作り、音響機器の設置、駐車場の整理、そしてリハーサルと、あらゆる仕事をすべて教会員の手で行ないました。会員たちが力を合わせて、これほど真剣にひとつの事柄に取り組んだことはかつてありませんでした。

いよいよ当日、祝賀会は盛大に催されま

した。系図探求やそのほかの教会活動の紹介なども含め、会のプログラムは出席者からの共感を得ることができ、「これこそ本当の祝賀会ですね」と喜ばれました。

今思うと、あれだけの人数で祝賀会を成功に終わらせることができたのが、とても不思議です。ひとつには、この機会を通して、教会のすばらしい教えをひとりでも多くの人に知ってもらいたいという気持ちが会員たちの心にあふれていたからだと思います。支部の会員一人一人が無意識のうちに宣教師になっていたのです。

こうした経験を積み重ねていくことによって、教会員が、個人としてまた支部全体としても大きく成長できるものと確信しています。兄弟姉妹が心をひとつにして働くときに、神様も共に働いてくださることを証します。(はらだ・よしゆき 1933年生まれ)



●全国各地のワード部/支部をご紹介するコーナーです。



## 20年後に見いたした 真の教会



石井一男

**高**校2年生のとき、友達に誘われて初めてキリスト教の教会に行き、聖書を読み始めました。そのプロテスタントの教会は普通の民家を貸りて集会所としており、スイスから来ている宣教師はかなり年輩の女性でした。

当時、学校の世界史でローマ帝国の歴史を勉強していましたが、なぜ、あの強大なローマ帝国が滅亡し、キリスト教が盛んになったのか、とても不思議に思いました。また、ロシア文学が好きだった私は、ドストエフスキーの小説を通して、人間の罪ということについても深い関心を持っていました。そのころ読んだある本の中に、モルモン教は現代の異端の宗教であると書かれているのを見て、そのとおりに受け取っていました。

それから21年たった1987年の9月末、買い物途中にこの教会の宣教師に声をかけられたのが、改宗するきっかけとなりました。

た。

そのときに「新しい聖書」をいただきました。読んでいくとニーファイ第三書というところに、イエス・キリストが古代アメリカの民を訪れたことなどが書いてあり、正直なところ驚きました。これはいったいどういう本なんだろうかと、といういふかしこい思いのままレッスンを受け始めました。

宣教師の話聞き、その教をいろいろと調べてみました。なぜなら、今まで私が知っていたキリスト教の教えとまったく違っていたからです。

多くの疑問がわいてきました。本を読むのが好きだった私は、特に教義と聖約を毎日2時間読みました。モルモン経より私にとってわかりやすかったような気がします。札幌にいる日本人の宣教師からも話を聞いたりしました。

宣教師のレッスンを受けて聖典を読み調べるにつれて、それまで聖書の解説書やほかの神学書を読んでも理解できなかったことが、次々と理解できるようになりました。まさに光明がさし込むように心の中が満たされていきました。

特に教義と聖約93章33節の「人は霊なり」という箇所を読んだとき、救い、聖霊、神の子といった、それまでなかなか理解できなかった言葉の意味が、はっきりとわか

るようになりました。いままでいろいろな宗教の本を読んできましたが、これほどはつきりと書かれてあるのは初めてでした。

また、私はこれまで、ジョセフ・スミスの受けた示現や啓示以上に力強い証を、どんな時代の牧師や神学者の言葉からも得ることはできませんでした。

様々な疑問の解決を聖典から与えられた私は、3カ月間の教を学び、バプテスマを受けました。

初めてキリスト教会に足を向け、聖書に触れてから20余年、私がこの教会に改宗するまで本当に長い道のりでしたが、今、ふるさとへ帰ったような安らぎを覚えています。

今の私の最大の楽しみは、愛する兄弟、姉妹たちと共に聖典を勉強することです。仕事サービス業のため日曜日に休むことができませんが、幸い勤め先が教会のすぐ近くなので、休憩時間に集会に出席しています。永遠の生命や昇栄について熱っぽく語る兄弟、姉妹と共に学ぶとき、時間のたつのも忘れてしまうほどです。

いつの日かこの地上での生活を終えて、再びこの教会、この小さな支部の兄弟姉妹と顔を合わせ、共に語り合えるのを今から楽しみにしています。(いしい・かずお 1948年生まれ、第二副支部長)

## お知らせ

### 新役員 の 任命

4月5日から5月4日までに管理本部会員記録統計課に通知のあった役員の異動(敬称略)

- 盛岡地方部気仙沼支部  
新支部長：大友勝博(前任者：斎藤美樹紀)
- 東京東ステークス部日立支部  
新支部長：海野文秀(前任者：木村敏則)
- 新潟地方部新潟支部  
新支部長：加藤真一(前任者：吉田博)
- 東京ステークス部所沢ワード部  
新監督：福田真(前任者：柿木良三)
- 東京南ステークス部大岡山ワード部  
新監督：猪狩謙(前任者：石坂晃一)

- 横浜ステークス部横浜第2ワード部  
新監督：片岡文一郎(前任者：山新田治)
- 本州軍人地方部座間軍人支部  
新支部長：Steven K. Tucker(前任者：Joseph Earl Thomas)
- 本州軍人地方部岩国軍人支部  
新支部長：Tommy David Cooper(前任者：Ronald Kelly Despain)
- 北陸地方部金沢支部  
新支部長：武田昭一(前任者：宮原成人)
- 神戸ステークス部尼崎ワード部  
新監督：笹耕治(前任者：原田明)
- 神戸ステークス部姫路ワード部

- 新監督：長谷川進(前任者：長野進)
- 神戸ステークス部加古川ワード部  
新監督：荒木篤二(前任者：橋橋憲史)
- 熊本地方部熊本北支部  
新支部長：八並正光(前任者：小笹康正)

### 新ユニット

- ★北陸地方部金沢北支部(1989年2月4日金沢支部から分割) 支部長：太田秀典
- ★本州軍人地方部三沢軍人第2支部(1989年2月19日三沢軍人支部から分割) 支部長：Robert Keith Frome
- ★仙台ステークス部青葉ワード部(1989年3月12日上杉ワード部から分割) 監督：菅原誠一郎

# 「幸福な家庭」を見つけました

荻山亜矢子

**小**さいころから、父親の暴力ばかり見て育った私には、家庭に対する関心などまったくと言っていいほどありませんでした。私が小学校5年生のとき、両親が離婚し、母と姉と私の3人の生活が始まりました。3人での生活はとても楽しく、私は母の笑顔をこのとき初めて見たような気がしました。ドライブに行ったり、食事に出かけたり、いつも3人一緒でした。

でも、そんな幸せも長くは続きませんでした。母は突然発病し、3年間の入院生活の末亡くなりました。再び笑顔のない生活に戻った私は、それまで熱心に行っていた部活動もやめ、ただ、なんとなく毎日過ごしていました。

1か月ほどたったある日、ふたりの外国から来た青年が私の家を訪れました。ふたりとも目を輝かせ、にこやかに接してくれました。そのときの笑顔を今でもよく覚えています。レッスンが始まると、ふたりの

人柄にますます心をひかれました。また、家庭というものにも関心を向けるようになりました。そして3か月後に私はバプテスマを受けました。

バプテスマを受けてからも、家庭に対する関心は高まっていきました。私の知っていた家庭と教会で見る家庭があまりにも違っていたからです。愛と模範のある幸せな家庭を初めて見ることができました。

それまでは、周りの人たちから両親についていろいろ言われると、気落ちしてしまうこともありましたが、教会に来て、真理を学ぶことにより、慰めと力を得ることができました。ふたりの宣教師に出会う以前には考えることのできなかつた、幸いに満ちた家庭を、私は近い将来、必ず築きたいと願っています。

ジョセフ・F・スミス大管長はこのように言いました。「神の王国、正義、進歩、発展、神の王国における永遠の生命と永遠の



増加の基は、神が定められた家庭にある。」  
 (「福音の教義」p.264)

神様があの日、ふたりの宣教師を遣わしてくださったことを心から感謝しています。また、いろいろな責任を通して奉仕し、成長する機会が与えられていることを感謝しています。そして、天のお父様が私たち一人一人をいつも愛し、見守ってくださることを証します。(おぎやま・あやこ 1968年生まれ、高松ステーク部今治支部初等協会第二副会長)

## 5月に召された宣教師の名簿


S:ステーク部, D:地方部, JMTC 第120期生18名

W:ワード部, B:支部

後列左から1~10, 11~18



〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 吉成比路志 <small>よしなり ひろし</small>	町田S/町田第2W	岡山伝道部
2. 高鳥 雅彰 <small>たかとり まさあき</small>	名古屋西S/御器所W	東京北伝道部
3. 松田 正彦 <small>まつだ まさひこ</small>	町田S/厚木B	仙台伝道部
4. 山野 宏之 <small>やまの ひろゆき</small>	北陸D/小松B	福岡伝道部
5. 兼本ゆかり <small>かねもと ゆかり</small>	沖縄S/浦添B	大阪伝道部
6. 後藤 晴美 <small>ごとう はるみ</small>	東京南S/渋谷W	福岡伝道部
7. 奥山 嘉邦 <small>おくやま よしくに</small>	鹿児島D/鹿児島B	神戸伝道部
8. 前川 克徳 <small>まへがわ かつのり</small>	沖縄S/普天間W	神戸伝道部
9. 茶屋 健二 <small>ちや けんじ</small>	東京西S/国立W	岡山伝道部
10. 矢原 康次 <small>やはら やすし</small>	岡山S/尾道B	東京南伝道部
11. 岡本 美和 <small>おかもと みわ</small>	山口D/下関B	東京南伝道部
12. 田村 英美 <small>たまむら えいみ</small>	東京南S/渋谷W	名古屋伝道部
13. 藤山 泰代 <small>ふじやま やすよ</small>	鹿児島D/谷山B	仙台伝道部
14. 木下 和美 <small>きのした かづみ</small>	広島S/五日市W	仙台伝道部
15. 中済恵美子 <small>なかずみ えみこ</small>	盛岡D/宮古B	東京南伝道部
16. 加藤ひろみ <small>かとう ひろみ</small>	長野D/長野B	神戸伝道部
17. 中村まゆみ <small>なかむら まゆみ</small>	神戸S/姫路W	東京南伝道部
18. 櫻田めぐみ <small>さくらだ めぐみ</small>	札幌西S/新琴似W	大阪伝道部



# 霊的な 知識について

テリー・ジェンクス

9歳のころの私は、姉とよく口げんかをしたものです。大抵の兄弟げんかがそうであるように、私たちの場合も、問題は口論の内容より、どちらが勝つかという点にありました。

しかしそのときばかりは、自分が正しいということに、誇りと「面目」がかかっていたようです。ふたりが言い争っていたのは、空に浮かぶ雲と地球の自転についてでした。私は理科の授業で、地球が絶えず自転していることを習ったため、雲は流れているように見えるけれど、実際に動いているのはその下で自転している地球なのだ、と考えていたのです。

ふたりの議論はいつまでたっても平行線のままでしたので、私たちの知識の源である母のところへ聞きにいきました。ふたりはそれぞれが、自分の考えが正しいことを期待して、口をそろえて聞きました。「お母さん、雲が動いているの、それとも動いているのは地球？」

母の説明では、地球は始終自転しているけれども、雲が動くのは風に吹かれるせいだ、ということでした。姉は喜び、私はがっかりしました。地球の法則に対する私の理解は不完全で、私は自分の考えを変える必要があったのです。ほかに知らなければならないことが、もっとあったのです。

あれから15年を経て、自分の考えがいかに幼稚であったかがわかります。自然界についての観察結果を、ことごとくみずからの断片的な乏しい知識に基づいて理解し、それで正しいと思っていたのです。これは、私がつと深い知識を得て、誤った知識が訂正されるまで、そのままでした。私たちは霊的な生活を向上させる途上で、福音について断片的な知識や理解しか持たないために、同じように、未熟な憶測に陥ってしまうことが何度もあります。そして、家庭で幼い子供を抱えている姉妹が交通事故で体が麻痺してしまっているのを見て、絶望的な気持ちになったり、酒に酔った運転手が罪のない人をはねて死亡させたからといって、この世に正義はないと言ったりします。

しかし、時がたち、試練や苦難の目的が理解できるようになると、負傷した姉妹が新しい生活を通して力を得、成長した姿を、私たちは目にするでしょう。また、時とともに救いの計画が理解できるようになるにつれ、次のようなことに気づきます。つまり、もしこの世に誤った行ないが存在しなければ、賢明な天父はその子らが持っている自由意志を取り上げられるでしょう。

私の科学的な知識が不完全だったように、自分の霊的な知識にも補足や修正の必要なことがよくあります。謙遜に祈りを込めて霊的な知識の源である天父に尋ねるならば、私たちが求めている知識や理解力は増していくでしょう。

「わが慰<sup>めぐみ</sup>は汝らに伴い、……理論と原理と、教義……は更に完全に教えらる。また天にも地にも地の下にも関わりあること……もまた然り。」(教義と聖約88:78-79) □



## 父を知らない

Craig Diamond

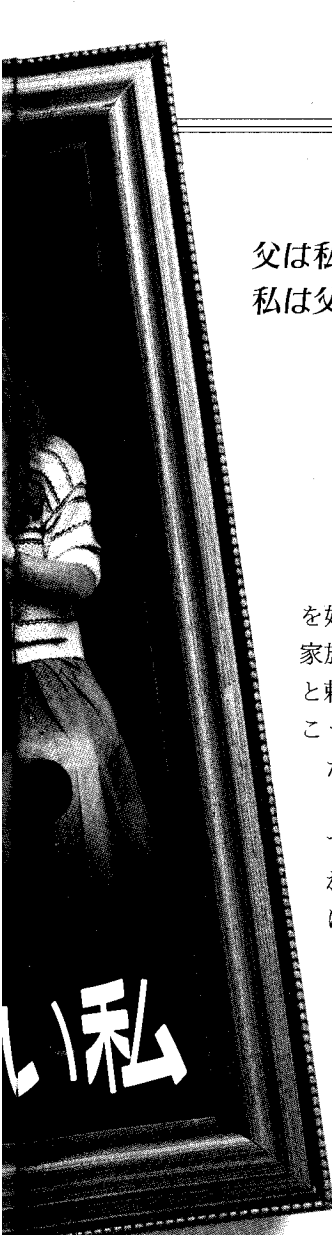
クロード・バーナード

**正**直なところ、私には父親がいたという実感がありません。父はまだ健在ですが、私にはまったくと言っていいほど父を知る機会がありませんでした。

覚えていることと言えば、しばらく家を空けたあとで夜ひょっこり帰ってくる父と、泣いている母の姿でした。父のことで記憶に残っているのは、家にはほとんどいなかったということだけです。

父のそうした行動が原因で、母がひどく体をこわし入院するようになってからは、父に対しては、次第にただ混乱と動揺の気持ちを感じるだけとなりました。

ある日、母を慰めようと病院へ行って帰ってくると、父が私に会いにきました。父はすでに別の女性と一緒に生活



父は私たちから離れて行きました。  
私は父を赦せるでしょうか。

を始めていました。私は勇気を振り絞り、家族のもとに戻り、一緒に住んでほしいと頼みました。すると父は弱々しい声で、こう言いました。「いや、それは無理だ。もう遅すぎるよ。」

父親がいないと、子供は情緒的にも不安定になります。母はいつも変わらぬ愛情を注いでくれましたが、私は裏切られたという気持ちをどうしてもぬぐいきれませんでした。

しかしいつまでもそんな気持ちのままではいられません。私の気持ちが初めて変化したのは、教会に入ったときです。教会員として、私は父を赦さなければならないと気づいたのです。しかしなお、私の心は混乱していました。父を赦さなくてはという気持ちはありましたが、

はつきり言って何をどう赦せばよいのかわかりませんでした。私は父を憎んだこともありませんし、父を傷つけたいと願ったこともありませんでした。しかし腹立たしさはまだ残っていたのです。父が選んだ生き方に対して、同情の念とともに怒りを覚えました。母は教会員ではありませんでしたが、主のみ守りがあるように、父のことも祈ってほしいと私に頼むのです。しかし私にはそれはできませんでした。どうしてもできなかったのです。

私が福音を学ぶにつれ、事態はますます悪化していくようでした。神権の大切さと、信仰をもって神権を正しく行使したときにもたらされる祝福について学んだときも、私は悲しくなりました。どうして自分の家には困った問題が起きたとき頼りにできる神権者がいないのだろう、そう考えては落胆するばかりでした。

しかし少しずつ変化が起こり始めていました。私は教会

員として、世の中や人々を違った観点から見るようになってきたのです。まず悪い習慣をやめ、主が望んでおられるような生き方をしようと努めました。また祈りが大きな慰めとなりました。というのは、自分の悩みを打ち明け、喜びや成功を共に味わえるお方がいることがとうとうわかったからです。うれしきで胸がいっぱいでした。自分が大切な存在であることを再認識したのです。主は確かに祈りを聞いてくださるのです。

私には天の父がいてくださること、すなわち、私は霊において天父の息子であるということを知りました。自分を支え励ますために喜んで手を貸してくださる方がいるということに私は胸がいっぱいになります。私はすばらしい贈り物をいただきました。それは帰属感とでも言いましょうか。私は決してひとりではないのです。世界中の人々は、文字どおり同じ天父から生まれた兄弟姉妹なのです。時折私は周囲の人々を見てはこう思います。「私はとてもいいことを知っている。それをみんなに教えてあげたい。私たちは兄弟姉妹なのだから。」

主は私に力と平安と達成感を与えてくださいました。また、赦しがすべてを包み、力を持つのはなぜかを理解させてくれました。バプテスマを通して主は私の罪や咎<sup>とが</sup>を赦してくださいました。また今でも、罪を犯したときに真心から悔い改めるならば、赦してくださいます。このような特権にあずかるには、父を赦さなくてはなりません。私は父がどんな行動をしようとも、心の中で非難を浴びせるのではなく、敬意を示し父を助ける方法を探すべきであるということを知りました。

私にとって、それは確かに長くつらい戦いです。またもはや肉体の父を求めていないと言えばそれはうそになります。けれども今は父の方が助けを必要としているのです。祈りと行ない模範を通して、私はいつの日か、父自身も神の子供であるということに自覚するように力を貸せるのではないかと思っています。□



# 母国の民に福音を伝える

メキシコや中央アメリカ、そして世界中で召されている地元の  
宣教師たちは、予言の言葉を今、成就しています。

デビッド・アントニオ・パラダ長老とセルジオ・サーベドラ長老は、角を曲がって次の通りへ出ると、サンサルバドルのにぎやかな町並みを歩いて行きます。追い掛けっこをする子供たち。犬のほえたてる声。頭の上に、食べ物や洗濯物を入れたかごを乗せて通りを行き交う女性たち。

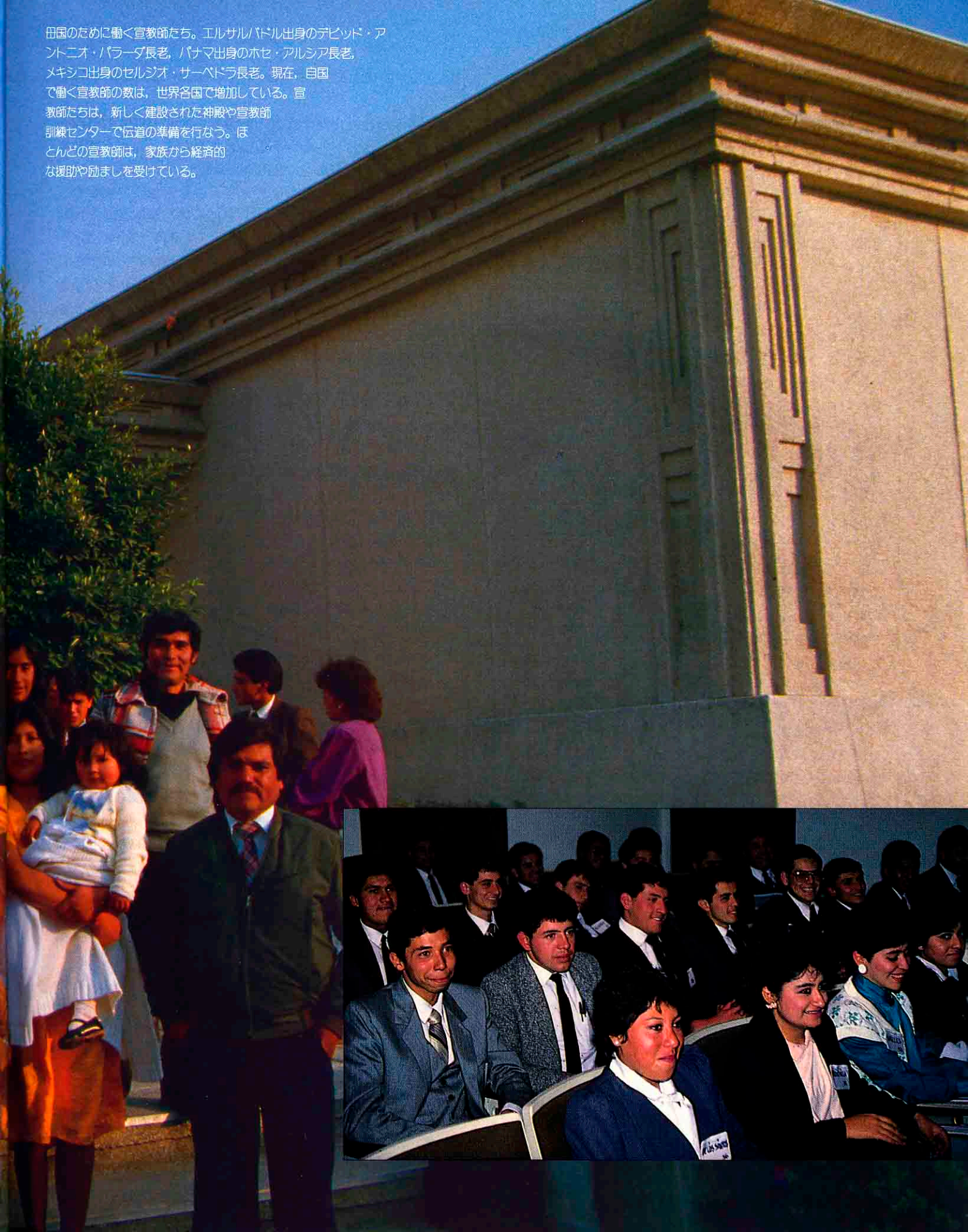
開け放たれた窓から鳴り響くラジオの音。どの放送局からも、エネルギーあふれるラテンリズムの音楽が聞こえてきます。

約束の時間に長老たちが赤いペンキを塗った家に着くのと同時に、これからレ

マービン・K・ガードナー



母国のために働く宣教師たち。エルサルバドル出身のデビッド・アントニオ・パラダ長老、パナマ出身のホセ・アルシア長老、メキシコ出身のセルジオ・サーベドラ長老。現在、自国で働く宣教師の数は、世界各国で増加している。宣教師たちは、新しく建設された神殿や宣教師訓練センターで伝道の準備を行なう。ほとんどの宣教師は、家族から経済的な援助や励ましを受けている。



ッスンをする婚約中のふたりも向こうからやって来ました。そして、宣教師たちを家の中へ招き入れると、いすを円く並べました。祈りが終わると、女性の方が別室からモルモン経を持ってきました。

「お祈りは続けていらっしゃるでしょうか。」パラダ長老の質問にその女性はうなずきます。「モルモン経も毎日読んでいますか。」ニューファイ第三書の11章を読むのが宿題でした。はい、と答えたふたりに、長老はこう言いました。「それはすばらしい。これからも毎日読んで、モルモン経について祈り続けてください。聖霊の力によってこの記録が確かなものであることが必ずわかります。」

きょうは救いの計画についてのレッスンです。パラダ長老は自分のボールペンを分解しました。「私たちの肉体は、ちょうどこのボールペンの外側のようなものです。そして、私たちの霊というのは、インクの入っているこの内側のようなものです。」この簡単な視覚教材を使って、パラダ長老は死と復活のことも説明しました。女性から質問が出ると、パラダ長老は印がびっしりとついた聖典から、聖句を引用して答えます。

さて、今度はサーベドラ長老が教える番になりました。ふたりの宣教師は、ここでは何の違和感もない様子です。言葉や文化の違いに悩まされることはありません。それまで外で洗濯をしていたこの女性の母親も中に入って、レッスンを少し聞いています。外ではおんどりが鳴き始め、めんどりが数羽、開け放したドアの向こうを歩いていきます。窓からはそよ風がやさしく吹き込み、奥の寝室のドアの役目をしているカーテンがひらひら揺れています。レッスンは滞りなく済みました。宣教師たちが帰り支度を始めると、母親がにっこり笑いながら、握手を求めにやって来てこう言いました。「明日は、あのふたりを連れて教会へ行けると思いますよ。」

### 「私たちは自立しなくてはなりません」

スペンサー・W・キンボール大管長は1974年に、世界の国々が「自国で働くに十分な数の宣教師をみずからの力を出し」、さらに「自国で必要とする数をはるかに上回る数の宣教師を送り出し」て、世界のほかの国々を助けていただきたい、と言われました。(「エンサイン」1974年10月号、pp.13-14参照) 現在、その呼びかけにこたえて働いている宣教師が、数千人います。パラダ長老(エルサルバドル出身)とサーベドラ長老(メキシコ出身)もそうした宣教師のひとりです。

メキシコでも中央アメリカでも、その理想を実現するような出来事がたくさん起きています。キンボール大管長が

強く呼びかけた1974年には、メキシコで働く宣教師の内、メキシコ人は25パーセントしかいませんでしたが、1988年には95パーセントになりました。エルサルバドルでは、100パーセントの宣教師が中央アメリカから召されています。6人が近隣諸国から召されているほかは、全部エルサルバドル人です。

あらゆる地域でみな、このような高い比率だというわけではありません。たとえば、コスタリカ・サンホセ伝道部では、まだ5分5分の割合です。マービン・アーノルド伝道部長はこう言っています。「できれば、ラテン系の人々が100パーセントになればいいのですが。でも、いずれそうなることでしょう。」

しかしながら、そのような傾向がだんだんと定着し、現在は大きく進展しています。1987年にはメキシコと中央アメリカから1,300人の男女が伝道に召されました。地元出身の宣教師の数の増加に伴って、伝道部の数も増加しています。1974年にはメキシコには5つの伝道部しかありませんでした。しかし、1988年には14にもなっています。さらに、バプテスマの数も上昇を続けています。メキシコ・モンテレー伝道部だけを取りあげてみても、1987年には1カ月に475人がバプテスマを受けたこともあります。メキシコと中央アメリカの改宗者のバプテスマは、去年は世界最高の4万人にも達しました。

地元出身の宣教師には、明らかに有利な点があいくつも見られます。言葉や文化の壁がないために、普通その国の人々を外国人よりはるかによく理解することができます。また、場合によっては、法律的政治的な事情で、アメリカ人宣教師の入国できる数が制限されることもあります。さらに、外国人を派遣することが得策ではない、あるいは不可能であると考えられる地域でも、ラテン系の宣教師なら働ける場合もあります。

エルサルバドルがその良い例です。1980年には、国の政不安のため伝道部が閉鎖され、宣教師たちはほかの地域に割り当てられました。その内の大部分はアメリカ人宣教師でした。1984年に伝道部が再開されましたが、それ以後アメリカ人宣教師はひとりも戻ることなく、地元出身の長老や姉妹たちが何の問題もなく働いています。

「今、私たちは、自分たちの力で伝道できるように心がけています。」こう語るののは、フランクリン・ヘンリケス伝道部長です。実は伝道部長自身もエルサルバドル人なのです。「ここでは目下のところ、必要な数だけの宣教師を、地元のステーキ部が送り出してくれています。さらに、グアテマラやホンジュラスやコスタリカで働いているエルサルバドル人宣教師もいます。」

## 開拓者の兄弟たちの模範

真新しいワイシャツとスーツに身を固めたエンリケ・ヘルナンデス長老は、飛行場に向かっています。コスタリカのサンホセからグアテマラシティにある宣教師訓練センターへ行くためです。13日たてば、またコスタリカへ戻って来て伝道を始めるのです。

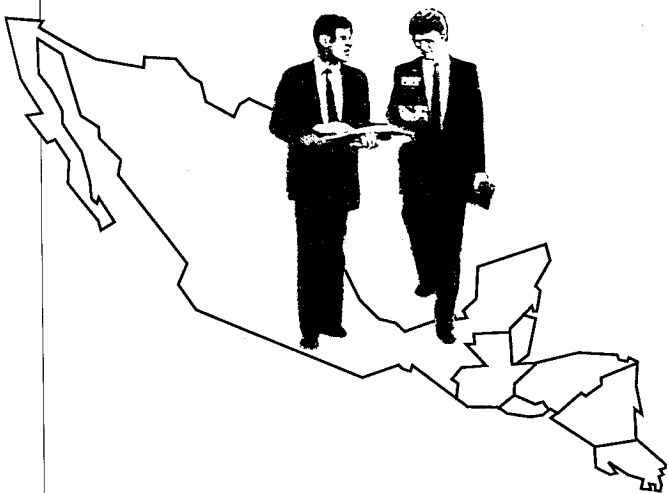
飛行場まで送ってくれたのは、長老の家族ではなく、宣教師たちです。なぜでしょうか。長老はこう答えます。「私の両親は教会員ではありません。それに、貧しくて、はるばる飛行場まで見送りに来るだけのお金もないのです。今朝、家族を一人一人起こして、出発前の最後のお別れをしました。」

長老の説明によれば、父親は64歳で失業中のため、家を出られては困ると言ったそうです。仕事に就いていたのは長老と妹だけで、ふたりの収入で家族7人を支えてきたのです。長老が伝道に出てしまえば、当然収入が減ってしまいます。

長老はこう続けます。「今朝、家族を残して出てくるのは、本当につらいことでした。私がいなくなったら、家族はどうやって暮らしていくのでしょうか。ただただ、主の祝福におすがりするだけです。」

飛行場に向かう車の中で、長老は考え深げにこう語りました。「開拓者の兄弟たちが示した模範を思うと、勇気がわいてきます。開拓者たちは、宣教師として主に仕えるために家族を残して行きました。しかも貧しい家族がほとんどでした。開拓者にできたことなら、私にもきっとできます。」

ヘルナンデス長老のような新しい宣教師たちが、メキシコとグアテマラにある宣教師訓練センターへ、2週間ごとにやって来ます。大部分は学業や仕事を中断してきた人たちです。奨学金を辞退したり、職業や地位を捨てて来た人たちもいます。家族の祝福を受けて来る人たちもいますが、



一方で、家族からは何の援助も励ましも受けられない人もいます。大部分は貧しい階層の出身です。会員たちが多少食事を提供するようになったため、伝道の費用は削減されつつありますが、それでも、大部分の宣教師にとっては、毎月の費用の3分の1を負担することすら大変な状況です。しかも、同時にふたり以上の子供を伝道に出している家族も珍しくはないのです。

最近では、新しい宣教師の会員歴は、平均してまだ5年です。教会員の子供として生まれた人はたった15パーセントで、25パーセントが会員歴2年未満です。そして約40パーセントの宣教師は改宗者であり、親が会員ではありません。

## 「私たちが入って行けないような家にも、彼なら入って行けます」

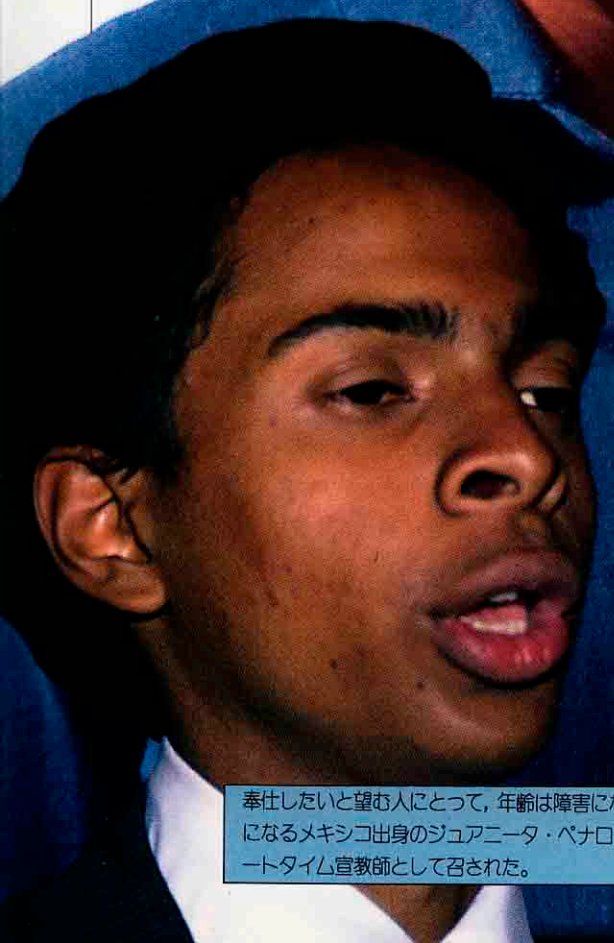
「先日は壊れた水道管を直してくれてありがとう。」

ホセ・アルシア長老は笑いながら答えました。「いやあ、姉妹。大したことはありませんよ。」この前の訪問のとき、この姉妹の8歳の息子が庭の水道管を壊し、歩道にまで水が吹き出してしまったのです。1時間後、教会員にも手伝ってもらって、長老たちは修理を終えました。きょうは、その子がレッスンの場から逃げ出そうとするたびに、アルシア長老がその子に簡単な質問をして、上手に遊ばせながらレッスンへ引き戻しています。

夫と別居しているその母親は、レッスンの内容に感動しています。アルシア長老とその同僚は思いやりをもって教え、神様と隣人を愛し、純潔の律法と知恵の言葉を守るように言いました。「20年たって、宣教師がいなくなったあとでも、このような律法に従って生活しますか。」アルシア長老が尋ねます。

「もちろんです。」そう答えた彼女は、2週間後にバプテスマを受けることになりました。

アルシア長老の教え方を見ると、教会歴も長く、経験も豊かな宣教師のように思えるでしょう。でも実際には、この24歳のパナマ人宣教師が宣教師訓練センターに入ったのは、あと13日で会員になって1年になるという時でした。伝道部長の補佐を務めるアメリカ人宣教師が、コスタリカ伝道部におけるアルシア長老の働きについて、次のように述べました。「伝道部長は、伝道があまりうまく進んでいない地域へアルシア長老を派遣します。すると長老は、どこへ行っても人々の関心を引きつけ、たくさんの人にレッスンを教え、バプテスマを施すのです。私たち外国人にはない何かがあるんです。私たちが入って行けないような家にも、彼なら入って行けるのです。」



奉仕したいと望む人にとって、年齢は障害にならない。103歳になるメキシコ出身のジュアニータ・ペナローザ姉妹は、パートタイム宣教師として召された。

## 美しい伝道地

昨晚、メキシコのモンテレーにひょうの嵐が吹きました。今朝は、舗装されていない道路は泥の海です。ミリアム・ソサ姉妹とローラ・アルカラ姉妹は、セーターとコートをや暖かそうに着込んでいます。(ここではいつでも日がさんさんと輝いているわけではありません) 前にもこんなことがあったので、ふたりは頑丈そうなくつをはいて出てきました。

このふたりは幼なじみに見えるかもしれません。それほど大の仲良しです。ふたりとも目はキラキラ輝き、話をするときには熱意がほとばしります。どちらも末日聖徒の3世で、父親はステーキ部長、弟たちも現在宣教師として働いています。

しかし、最も大切なことは、ふたりとも伝道精神に満ちあふれているということです。この地域では1週間に15回もレッスンを教えることは、かなり大変だという人もいます。ところが、ふたりは1週間に65回以上のレッスンをしたことが、1度ならずあるのです。

「自分を捧げること、これしかありません」と語るソサ姉妹は、本当に謙遜な人です。「私たちは心から主を信頼しています。」

「それに、今教えている人たちを心から愛しています」と言うのはアルカラ姉妹です。「私たちが持っているものを、あらゆる人に与えたいと思っているのです。」

伝道に出て8カ月になるソサ姉妹は、これまで55人をバプテスマに導きました。大部分は家族そろって改宗し、神殿に入る準備をしています。この週末に、あと10人のバプテスマがあります。

今朝、ふたりはぬかるみで足を滑らせそうになりながら、足が抜けなくなるわよとか、転ぶわよ、などと楽しそうに話しています。でも、決して足が抜けなくなることも、転ぶこともありません。その歩みは速く、確実です。一軒の

小さな家にたどり着くと、ドアをノックしました。両親は留守で、おじいさんと3人の孫が姿を見せました。裸電球が部屋を照らしています。もう歯がなくなってしまったおじいさんは、片目が不自由なことや、腕が痛いことをこぼしています。いろいろとしゃべりながらも、宣教師の話に耳を傾けてくれます。一番年長の孫娘は、一番小さな子をひざの上に抱えています。年上のふたりは、注意深く話を聞き、聖典を読み、質問にきちんと答えています。終わりに娘のひとりがお祈りを捧げると、姉妹たちは、今度両親のいるときにまた来るからね、と約束して帰って行きました。

再びぬかるんだ道を、『わたしは神の子』を歌いながら歩いていき、野原を横切りました。次の家では、別のレッスンを教えるのです。レッスンが終わると、母親はこう言いました。「レッスンの間、とてもよい気持ちを感じました。」「それはきっと神のみたまが、これは真実であると証をしたのです」とアルカラ姉妹が説明します。この家族は、日曜日には教会へ行くと約束してくれました。

通りへ出ると、姉妹宣教師たちは歓声をあげました。泥だらけの道をまた曲がると、ソサ姉妹がこう叫びました。「宣教師にとって、ここはなんて美しい所かしら。」

## ただひとつの問題

ペナローザ姉妹は、ぜひ伝道に出たいと思っていました。毎年この希望を監督に伝えたのですが、一向に召しが来ません。そこでとうとう伝道部長の補佐をつかまえて、事情を説明しました。そこで長老たちは伝道部長に電話をしてくれました。

「この姉妹は伝道に出たがっています。でもひとつだけ問題があるんです。」

「どんな問題ですか。」

「年齢です。103歳なんです。」

エンリケ・モレノ伝道部長はペナローザ姉妹と面接し、夏の2カ月間だけ働く宣教師に召すことにしました。任地は自宅から2時間ほどの所にあるプエブラです。そして信仰が強くて有能な姉妹たちが同僚として召されました。任地のワード部の会員たちは、彼女に対して深い思いやりを示し、自分たちの友人にぜひレッスンを教えてほしいと願い出ました。モレノ伝道部長はこう語ります。「み業を進めていくうえで、彼女は大きな祝福をもたらしてくれました。会員にとっても宣教師にとっても、大きな励ましとなったのです。」



宣教師たちは、回復された福音を自分の家族に伝え、家族全員を教会へ導くときに、共に一層強く生きることができるようになる。グアテマラ、クサルテナンゴ出身のブランカ・エミリア・グラマージヨ姉妹は、コスタリカで伝道中に、両親がバプテスマを受けた。

### 「とても幸せだ。おやすみなさい」

エズワルド・ロペス長老とその同僚は、1カ月前にこのモンテレーの近くで、ある家を間違えて訪問してしまいました。別の家を探していたのですが、間違えた先のメンドーサ家族が宣教師の教えに興味を示してくれたため、ここでも教えることになりました。メンドーサ姉妹は、実は10年前にバプテスマを受けていたのですが、夫の理解がなかったために、教会へはほとんど出席できなかったのです。ところが今度は、夫も喜んで話を聞いてくれました。そして、夫もふたりの子供もバプテスマを受けたのです。

メンドーサ家の隣に住む主婦ヘルナンデスさんは、レッスンの最中に偶然訪ねて来ました。それがきっかけで彼女も、夫やふたりの子供と共に、バプテスマを受けました。またもうひとり、近所に住む主婦ロペスさんも、みんなが何をしているのか様子を見にきました。その結果、5人の子供とひとりの姪と一緒にバプテスマを受けることになりました。夫ももうすぐバプテスマを受ける予定です。間違えて一軒の家を訪問したことをきっかけに、ロペス長老と同僚はこれまで14人をバプテスマに導きました。しかも、みなこの1カ月のうちに起こったことです。ほかにもこの14人に続く人たちが、まだまだたくさんいるのです。

最近バプテスマがあつてからまだ1週間もたっていないですが、今朝、長老たちはヘルナンデス家族を訪問しています。ヘルナンデス兄弟は、長いすに座ってロペス長老の肩に腕を回してこう言いました。「私たちはこの宣教師を、自分の息子のように心から愛しています。」兄弟は、最初長老たちに会ったとき、失業中でした。しかし、一緒に断食し祈った結果、その翌週、ある石油会社に採用が決まったのです。

3人が話をしていると、ほかの家族もやって来ました。小さい居間は人でいっぱいになります。お互いに抱き合ったり笑いながらあいさつをしていると、だれかが、これまでバプテスマを受けたのは何人いるのか、と数え始めました。別の人が部屋へ入って来るたびに、元気な声が響きます。「彼もバプテスマを受けたんだよ。」近所の人を全部バプテスマに導こうと、皆は楽しそうに話しています。1年もしたらみんなでそろって神殿へ旅行しようという声も聞かえてきます。

ロペス長老と同僚には、チラシ配りをする必要はほとんどありません。通りであいさつをした人には、いずれレッスンを教えることになります。家の前で新聞を読んでいる人がいれば、間もなく福音についてレッスンが始まります。車を洗っている人を見かければ、すぐに教会について紹介します。お休み会員の家で母親と子供に会えば、即座にレ

ッスンが始まります。「先週、7人家族にバプテスマを施しましたが、そのきっかけは通りでその家族の子供たちと仲良くなったことです。子供たちが玄関で『長老、こんにちは』と言ってあいさつをしてくれれば、親たちに会うのはずっと簡単になりますよ。」

「夜、家に帰るときには疲れきっています。ですから、日記はほとんど短いものばかりです。こんな感じです。『非常に疲れた。今日はとてもいい一日だった。すぐにでも福音を受け入れてくれそうな家族を見つけた。家庭集会が12あった。とても幸せだ。』」

### 「伝道中に学びました」

外は真っ暗になりました。集会場にはだれもいません。電気も消えています。でも、ステーキ部長の部屋だけはまだ明かりがついています。モンテレー・モレロスステーキ部のアドルフォ・イバーラステーキ部長は、まだ23歳です。副ステーキ部長は、ひとりが31歳、もうひとりが25歳で、3人とも帰還宣教師です。

この3人は、伝道中にどんなことを学んだのでしょうか。イバーラステーキ部長はこう答えました。「イエス・キリストをより深く知るようになりました。また、奉仕すること、愛すること、そして人々の心を動かすことを学びました。」さらに、指導力も身につけました。「私は、監督長老に召されるまでは、面接など一度もしたことがありませんでした。最初の面接には3時間もかけてしまいました。でも、すぐにこつがのみ込めましたよ。」ステーキ部長は笑いながら言いました。

第一副ステーキ部長のアドルフォ・レイエイス兄弟は、20歳の年にバプテスマを受けました。1年後に宣教師になり、巡回宣教師を18カ月間務めました。「このステーキ部長会の召しを受けてからも、同胞のために仕えるという点では、伝道中とまったく同じです。現在私たちに与えられている責任は、宣教師の責任とは少し違います。でも、自分の時間を主に捧げることには何ら変わりありません。」

第二副ステーキ部長のパブロ・モレノ兄弟は、こう語ります。「私は改宗者です。私が今、主と教会について知っていることはすべて、伝道中に学びました。」

現在このステーキ部は、27人の宣教師を送り出しています。イバーラステーキ部長は、宣教師の家族にも大きな祝福がもたらされる様子を目にしてきました。たとえば、教会員ではなかった親たちがバプテスマを受けた例や、あまり活発ではなかった親たちが教会へ戻ってきて、神殿へ行くようになった例、刺激を受けた弟や妹たちが伝道へ出る例などもあります。また、家族が祝福に満たされ、さらに

一致し、健康になる例もたくさんあります。そして、帰還宣教師の大部分は神殿で結婚しています。

イバーラスターキ部長の話が続きます。「宣教師が解任されるときには、すぐに何らかの責任に召します。ある姉妹については、すでに帰還する1カ月前に、スターキ部の若い女性副会長に召すよう決定していたほどです。私の場合も、伝道を終えて飛行場から家へ向かう途中で、自分がもうスターキ部の幹部書記に召されていることを知りました。」

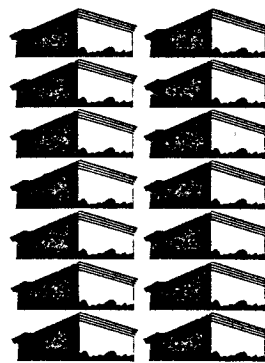
モノノ副スターキ部長もこのように述べています。「私が高等評議員に召されたのは、宣教師の召しを解任される面接の最中でした。休む時間はまったくありませんでした。それは今でも同じです。」こう言って副スターキ部長は、にっこり笑いました。

### 角を曲がって

パラダ長老とサーベドラ長老は、婚約中のふたりに別れを告げて、また通りを戻っていきます。「あのふたりの長老と一緒に働く姿は、本当に美しいですね。」後に伝道部長はこう語りました。パラダ長老は小作農家の息子で、非常に貧しい家庭の出身です。一方、後輩同僚のサーベドラ長老は、駐エルサルバドルのメキシコ領事の息子です。パラダ長老は、伝道に出る費用をためるために農場で何年間も働きました。一方のサーベドラ長老は、車やステレオのある生活を楽しんでいました。そのふたりが今心をひとつにして、謙遜に、自信を持って、堂々と福音を宣べ伝えるのです。

ふたりは峡谷にかかった揺れる小橋を渡ります。それから、角を曲がって次の通りへ出ると、サンサルバドルの隣り町を歩いて行きます。□

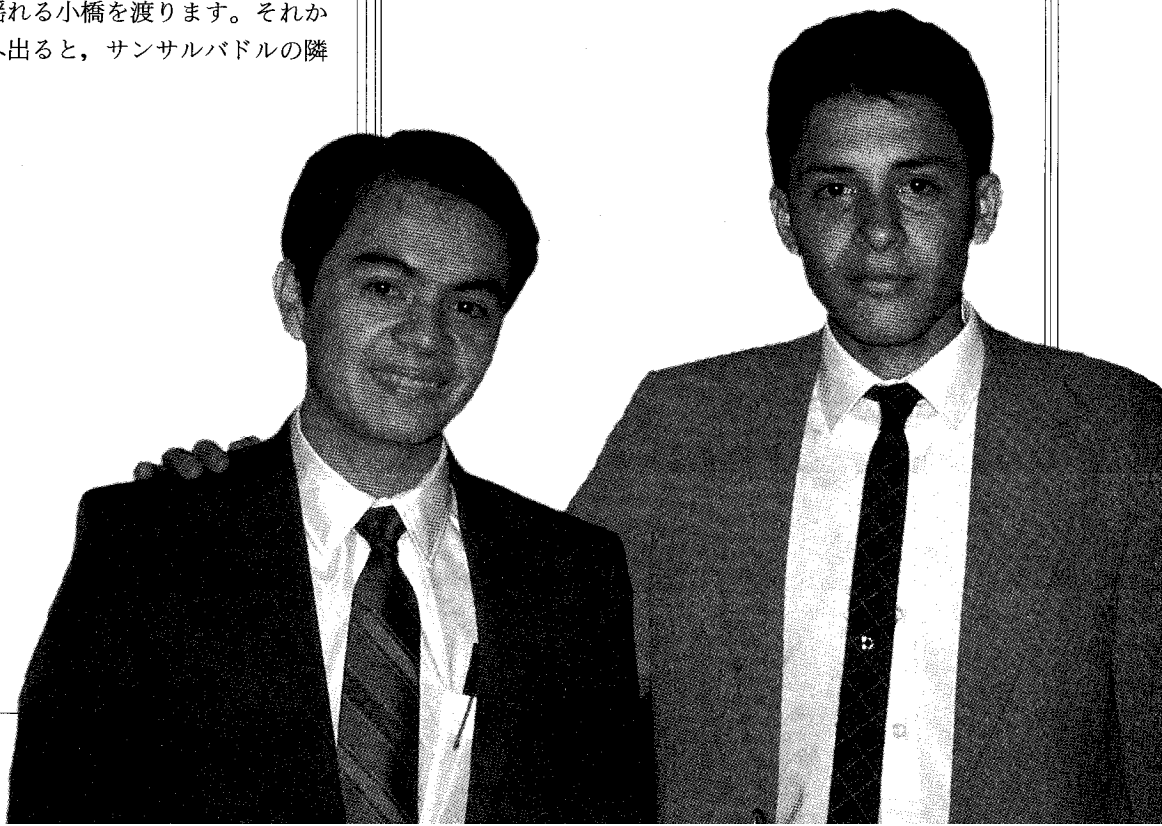
グアテマラシティーの宣教師訓練センターへ向かうコスタリカのサンホセ出身のエンリケ・ヘルナンデス長老とカルロス・レイエンス長老。訓練センターは、現在世界中に設けられている。



## 世界中で増加している 地元出身の宣教師

メキシコや中央アメリカで地元出身の宣教師の数が増加していますが、それに伴い世界各地でも同じような現象が起きています。この10年間でその数は、3,850人から10,608人へと、およそ3倍になりました。現在伝道中の35,000人の専任宣教師の内、ほぼ3分の1が合衆国以外から召された人々で、出身地は71カ国、6属領に及んでいます。

さらに、宣教師訓練センターの数も増加しています。10年前には1カ所（コタ州プロボ）だけだったものが、現在では14カ所に増加し、アルゼンチン、ブラジル、チリ、英国、グアテマラ、日本、韓国、メキシコ、ニュージーランド、ペルー、フィリピン、サモア、トンガに設置されています。こうしたセンターはみな、神殿の近くにあるため、遠方から赴任してくる宣教師は、伝道地へ行く前に、地元で宣教師の訓練と神殿の祝福の両方を受けることができます。





# それだからあなたがたも 完全な者となりなさい

目的：完全を目指して努力する。

**キ**リストは弟子たちに、ご自分と御父のように完全な者となるように、と命じられました。(マタイ5：48；IIIニーファイ12：48参照)しかし、この戒めはとてむずかしく思えるかもしれません。自信をなくしてしまう人もいるでしょう。また、自己の完成のむずかしさに思い悩んだ末に、奉仕よりも、自分を美化することに心を奪われてしまうような人もいます。

モロナイは次のように教えています。「キリストの御許<sup>みもと</sup>に来てキリストによって全くなれ。すべて神のみこころに背くことを捨てよ。……勢いと心と力とをつくして神を愛するならば……あなたたちはこの恵みを受けてキリストにより全くなる。」(モロナイ10：32)

主を愛し、主に仕え、戒めを守る人は、「キリストによって全くなる」ことができます。そして逆境の中にあっても、平安と力を感じることができるのです。重荷に耐える力が強められ、ほかの人の重荷を軽くする助けもできるようになります。(ガラテヤ6：2；モーサヤ18：8-10；24：14-15, 21；アルマ33：23参照)

私たちは、完全な者になるという点において、予言者ジョセフ・スミスの例から、慰めを得ることができます。主はあるときジョセフ・スミスにこう勧告されました。「汝更に急ぐことなく……与えられたる力と方法以上に働くことなかれ。」(教義と聖約10：4)これは私たちにも言えることです。力と方法以上に働くことは求められていないのです。また今すぐに、すべての面で完全になるように求められているわけでもありません。ブルース・R・マッコンキー長老はこう述べています。「日の栄の王国に救われるに

は、完全な者にならなければなりません。しかし、現世で完全になれる人はだれもいません。それができたのは主イエスだけです。主はすべての人に勝るお方です。イエスは神の御子でした。……『キリストにより全くなる』とは、ひとつの過程です。」「(年度講話1976」1977年, pp.399-400)

完全な日を過ごすという監督のチャレンジを受け入れて、この過程が実際にどのようなものかを学んだ人々がいます。ある若者は、朝聖典を読むとその日一日が楽しく過ごせることを学びました。また、病気の会員を見舞って大きな喜びを感じた夫婦もいました。('完全な日」「聖徒の道」1989年4月号, pp.10-14参照)

私たちは主の助けにより、少しずつ完全になっていくのです。マッコンキー長老は次のように述べています。「きょうから始めて、明日はもっとよく戒めに従うようになります。そして恵みに恵みを受け、階段を一步步昇りつめ、成長し、完全な人間になるのです。」私たちに求められているのは、「きょうから始め」ることです。□

## 訪問教師への提案

1. IIニーファイ31：19-20を読み、完全な者となる過程について、この箇所にはどのようなことが書かれているか話し合う。
2. 何かの戒めについて、前よりもよく従えるようになったという経験があれば、それを話す。訪問先の姉妹にも、同じような経験について話してもらおう。(「家庭の夕べアイデア集」 pp.7-23, 55-70参照)

# 人生の勝利者



ケンドラ・カスル・フェイア

**場**内は一瞬静まりかえったようです。観衆の目が競技場に一齐に向けられました。だれもがひとりの少女に注目しているようです。その少女は前の平均台の演技でも、観衆の目を引いた選手でした。今、その少女は段違い平行棒に取り組んでいます。

彼女は、ダイアン・エリングソンという15歳の少女です。スラリとした身体に金髪のポニーテールは、いかにも体操選手といった姿をしていました。しかし、観客は少女のすばらしい外見より、もっとほかの何かに引きつけられているようです。

たぶん、床運動でリズムカルに舞う、自信あふれる演技に見とれてたのかもしれない。あるいは、段違い平行棒でのみごとな離れ技であったかもしれません。ダイアンは跳馬でも、いともたやすく宙を舞いました。しかし、それらすべてに勝って観客が心を引かれたのは、おそらく彼女が満場の人々に抱いていた天性の愛だったのでしょう。事実、彼女が完璧な演技を決めて勝利の笑みを見せるとき、場内の人々はそれを感じたのでした。

もちろん、演技が完全でなかったときでも、彼女の笑顔には観客を魅了する特別なものがありました。かつてダイアンは、演技の最後の着地で顔をぶざまに床にぶつけてしまったことがあります。折あしく、テレビで全国放映されている大会でした。そのときでも、彼女は客席から満場の拍手がわきあがるまで、笑顔で手を振ってこたえました。また、ちょうど彼女の18歳の誕生日に行なわれた大会では、審査員に事情を伝え、観客に「ハッピーバースデー」の歌を歌ってもらうように願い出ました。「少しも恥ずかしくなんかなかったわ。せっかくだから2度も歌ってもらった

のよ。」ダイアンはそう話します。

ダイアンは小さいときから、周囲の注目を集めるのが好きでした。9歳か10歳のころ、ダイアンがなかなか学校から帰ってこないことがありました。父親が探しに行くと、ダイアンは輪になった子供たちの真ん中で、宙がえりのまねをし、みんなを喜ばせていたのです。

姉のマリーは、そんなダイアンの子供のころを思い出して笑います。「家族の写真を見てもらったらわかります。ダイアンはいつも前に出てきて、目立とうとするんです。父がほかの人の写真を撮っていると、必ずダイアンが中に入ってくるんです。」

そのようなダイアンの性格は、体操に打ってつけでした。ダイアンはこの体操に生涯の愛を注ぐことになります。しかし、体操が自分に向いていることを両親に説得することは簡単ではありませんでした。当時の彼女にはほかにもっとしなければならぬことがあったのです。

マリーはこのように述懐しています。「私たちの家族には7人も子供がいて、とてもダイアンに習い事をさせる経済的な余裕はありませんでした。ダイアンはひとりで体操のジムに行き、月謝の代わりにそこで働かせるようにコーチに頼んだのです。彼女は、練習の後、マットをきれいにしたり、トイレの掃除をしたり、何でもできることをしてレッスン代に当ててもらいました。」

人々の注目を集めるのが好きな性格は、その運動能力とすぐに結びつき、このふたつの資質のおかげでダイアンは数々の優勝を手に入れました。訓練を始めたのは14歳半からでした。競技選手としてはこれはかなり遅れたスタートでしたが、わずか1年足らずで全国で1、2を争う選手にま

で成長しました。高校時代は、ジュニア・オリンピックで優勝し、大学時代にはユタ大学の女子チームを率いて、初の全国優勝を果たしました。

学生大会への出場資格がなくなってからは、ダイアンはプロの全国ツアーに参加する決心をしました。自分の選手生活がほとんど終わっていたことは知っていましたが、スポットライトを浴びる一瞬の緊張やスポーツの楽しさを、できるだけ長く味わっていたと思ったのです。

ダイアンは、全国ツアーのために跳馬の練習に取り組んでいました。跳馬はこれまで何千回となく経験していました。ダイアンはいつものように助走に入り、いつものように踏み台をけて跳び上がりました。ここまでは以前のおりだったのです。ところが、そのあとが違っていました。体を回転させて、いつもより少し遠くへ着地した瞬間、彼女は首の骨を折ってしまったのです。この事故のためにダイアンは6カ月近く入院し、残る生涯車いすで生活することを余儀なくされました。

事故が起きたのは、1981年12月15日でした。ダイアンは、ちょうどクリスマスを迎えるその月の下旬から翌年にわたる5カ月間、入院生活を送っています。その間、体操のできなくなったこれからの人生について思いめぐらしました。長い間スポーツに親しんできた彼女にとって、生活を変えることは簡単ではありません。

「私は病院にいるのがとてもいやでした。まるで監獄にいるみたいな気分なんです」とダイアンは語ります。最初の1カ月間、彼女は治療処置のために身動きひとつできませんでした。2時間おきに看護婦が来て、ほんの数センチ体の向きを変えてくれるだけです。ダイアンは、それほど長期間の入院になるとは、思ってもみませんでした。



「実は、入院したとき、1カ月以内に退院してツアーに参加できると信じていたのです。神を信じて十分な信仰を維持し、自分を信頼するなら、心配することは何もないと思っていたのです。確かにそのとおりでした。」

しかし、快復の道は容易ではありませんでした。むしろ、事態は悪化する一方に見えました。「私はひどい患者でした。心が落ち着かず、みじめな思いでいっぱいだったのです。周りの人には、つらくあたっていました。」しかし、そんなダイアンを変える日がやって来たのです。

「ある日、失意のどん底で、私はこれ以上耐えられないと思いました。」ダイアンは神権の祝福を依頼したのです。そのとき、癒しの力が注がれたことを彼女は感じました。「私は、それが神のみこころならば成就するように、という気持ちになっていました。それ自体が祝福でした。私は確かな平安を感じたのです。何が起きても大丈夫、という気持ちでした。もし私が病院から一步も外へ出られなくなったとしても、それは理由があるからだって思えたのです。私はいつも最善を尽くして福音に従い、期待されていることを行なっていると思っていました。だからもし、その平安の祝福を受けるにふさわしい人がいるとしたら、それは私だと思ったのです。そのときから、私は別人のようになりました。私は心からの慰めを得たのです。」

皮肉なことに、彼女の快復に一番役立ったことのひとつは、やはり体操でした。ダイアンはこう語っています。「体操で受けた訓練がなかったら、私は再起できたかどうかわかりません。体操選手時代、私は治療の必要なけがをたくさん経験しました。そしていつも落ち込んでまた立ち直って体操を続けていたんです。私はこのけがも、そこから立ち上がらなければならない、ひとつの訓練の過程だと思いました。もう一度立ち上がって勝利者になることを、体操は私に教えてくれたのです。」

ダイアンはもう二度と歩くことができないとわかったその日、さらに単位を取得するために大学に戻る決心をしました。ベッドに横になって、彼女は選手時代の数々の写真が張ってある思い出の詰まった、何冊ものスクラップブックを開いていました。思わず涙がほおをつたって、スクラップブックの上に落ちました。「私はそのとき、このままでは何もよくなりませんと

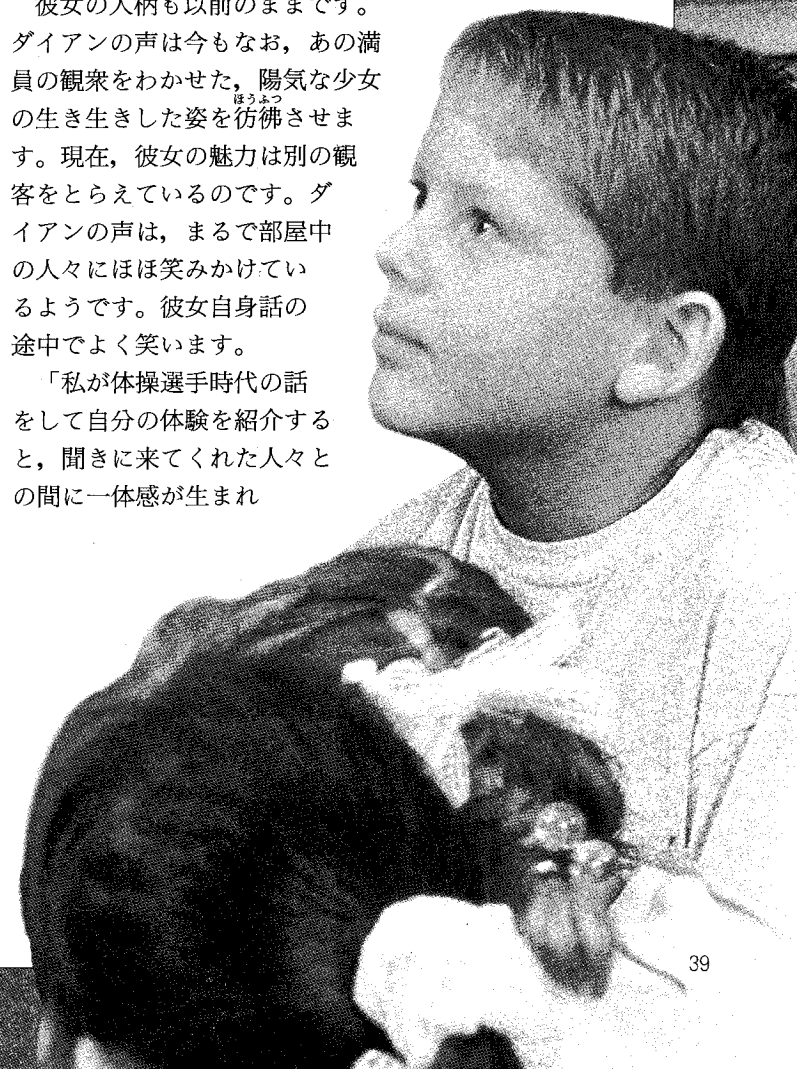
思いました。私は泣きながら考えました。「このまま、あきらめて何もかも投げ出してしまうか、それとも新しい自分の人生を歩き出すか、どちらかだわ。」そして私は学位を得るために、学校に戻る決意をしたのです。」

今、ダイアンは、小学校で7歳の子供たちを教えています。子供たちの背たけは、車いすに座ったダイアンのちょうど目の高さほどです。「子供たちはダイアンのためなら何でもします。あの子たちはダイアンのことが好きなのです」と姉のマリーは語っています。

ダイアンを慕っているのは、生徒たちだけではなくありません。ダイアンのファイヤサイドに来る青少年たちも、彼女の話に熱心に耳を傾けています。ダイアンの話は、希望と忍耐のメッセージであり、境遇に対する不平の影はどこにもありません。

彼女の人柄も以前のままです。ダイアンの声は今もお、あの満員の観衆をわかせた、陽気な少女の生き生きした姿を彷彿させます。現在、彼女の魅力は別の観客をとらえているのです。ダイアンの声は、まるで部屋中の人々にほほ笑みかけているようです。彼女自身話の途中でよく笑います。

「私が体操選手時代の話をして自分の体験を紹介すると、聞きに来てくれた人々との間に一体感が生まれ



るんです。彼らは私が車いすに乗っていることをすぐに忘れてしまいます。私は車いすに乗っているのに、相手との違いを強く感じるのですが、青少年たちは、私を自分たちと同じ普通の人であるかのように思っています」とダイアンは語っています。

彼女の訴えるメッセージは、何が起きても決してあきらめず、勝利を得るまで努力を続ける、ということです。「私がまだ体操選手になりたてのころ、ナンシー・ティースという少女に出会いました。彼女はオリンピックチームの一員であり、全国でも屈指の体操選手でした。彼女は私にいくつかの大切なことを教えてくれましたが、今でもそれを忘れてはいません。ナンシーは最初にこう言いました。『失敗を恐れちゃだめよ。もし、失敗したからといってやめてしまったら、優勝なんかあり得ないわ。でも、もう一度立ち上がって取り組みれば、いつか優勝する 때가来るわ。だから、決してあきらめないで。』」ダイアンは、その助言を忘れないで、何度失敗しても決してくじけないことを心に誓ったと言います。

しかし、ダイアンが人生の深刻な試練を迎えたとき、その助言を実行するのは容易なことではありませんでした。とりわけ車いすの生活を強いられるのは、彼女にとってつらいことでした。体操選手時代、段違い平行棒で体をひねるときも、単に遊びで逆立ちするときも、ダイアンが一番恐れていたのは、目が見えなくなるか、体が麻痺して動けなくなることでした。「私は車いすが怖くて、車いすに乗った人に話しかけたり、ただ近寄ったりすることさえ、ありませんでした。車いすに乗った人を避けていたんです。もし彼らに近づいたら、私も車いすに乗ることになってしまうような気がして怖かったのです。まるで、いつも車いすのことが頭から離れなかったために、かえって準備が整ったようなものでした」とダイアンは語っています。

ダイアンにとって一番よい備えになったのは、何ものにも負けない彼女の強い霊性だったかもしれません。ダイアンが愉快的話をするとき、永遠の観点に立つことの大切さや、天父が一人一人の子供たちに抱いておられる愛を静かに力強く証するとき、彼女の話にはみたまがあふれています。彼女は絶えずみたまを受けているのです。姉のマリーは次のように語ります。「私の父を除いて、私はダイアンに

勝る信仰を持った人を見たことがありません。ダイアンは、教会が真実であり、自分が正しいことをしているという強い確信を持っています。そして、いつでもすばらしい模範を示してくれます。」

ダイアンの話が終わると、部屋が暗くなります。そして、スライドが上映されます。軽快な音楽に合わせて、陽気な体操選手のダイアンが、次々とスクリーンに映し出されます。スライドが終わると、青少年たちは興奮しながらダイアンを取り巻きました。

「私の話を聞いて、もっと頑張ろうという気持ちになったという人に出会うと、とてもうれしくなります。ある少女は、4回も私の話を聞きに来たと話してくれました。初めて私の話を聞いたとき、彼女は自殺を思いとどまりました。2度目は、学校に戻ることを決心し、3度目は、クラスで一番よい生徒になることを目標にしました。そして4度目は、彼女がその目標に向かって努力しているときだったのです」とダイアンは話してくれました。

ダイアンは人々から賞賛の言葉を受けると、肩をすくめて、恥ずかしそうに笑みを浮かべます。戸惑いを見せるときさえありますが、これは人々の前に立つことに慣れているダイアンには珍しいことです。「『あなたはまったく驚くべき人だ、信じられないような人だ』とどこでも言われます。でもそうではありません。私のような立場に置かれたら、決して乗り越えられないと言う人に、私はこう言います。『乗り越えるか、死ぬか、どちらかしかないのです。』人生で与えられる試練は、たとえ自分が望んだものでないとしても、すべて乗り越えなくてはなりません。たとえば、家族のだれかが亡くなったら、その状況の中で努力して生きていかなければなりません。もし、首の骨を折ったら、それを受け入れて生きていくのです。しかし、時の経過と癒しの過程がどんなにすばらしいものかを知りましょう。人並み外れた能力など必要ないのです。」

ダイアンが負けなかったように、皆さんも負けないうでください。そうするのなら、いつか皆さんにも勝利を得る日が来るはずですよ。ダイアンにとって、彼女の得た勝利には特別な喜びが伴っているに違いありません。かつてあきらめていたものを、再び勝ち取ったのです。

彼女は人生の勝利者となったのです。□



関心のある青少年を前にして、ダイアンはよく話をします。それは希望と忍耐のメッセージであり、境遇に対する不満の色はみじんも感じられません。「どんなことがあっても、決してあきらめないでください」とダイアンは語ります。



つるぎをもって刺すように、  
みだりに言葉を出す者がある、  
しかし知恵のある人の舌は人をいやす。



箴言12:18 参照

# 指導者に関する メッセージ



「『起ちて己が光を輝かせ』(教義と聖約115：5)、世の光となり、人々の旗じるしとなりなさい。」(エズラ・タフト・ベンソン『次代を担う若人へ』「ニューエラ」1986年6月号)

「私は今、主がこの末日のために優れた霊の息子、娘をとっておかれたと予言者たちが語ったわけがよく理解できます。主は王国建設のために、本当に皆さんを必要としておられるのです。神の王国は……新しい目標に向かって発展し、成長していくことでしょう。……それは、王国をさらに高い次元に到達させるために、皆さんがどれだけよく準備して責任を引き受けるかに大きく依存しています。」(『1988年の指導者へ』「エンサイン」1979年3月号)

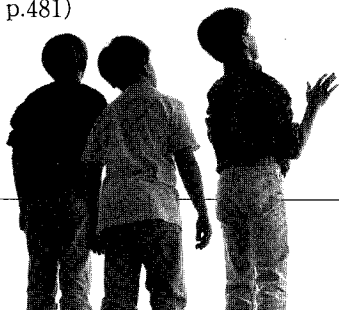
「イエスは、ご自身が何者であり、なぜ地上に来られたのかを理解しておられました。あいまいさや弱さとは無縁の、力強い指導ができたのはそのためです。」(「スペンサー・W・キンボールの教え」p.481)

「主はその永遠の目的を果たすために、ためらうことなく若い指導者を召し、備えができるように助けを与え、新たな召しに就かせてられました。」(前中央若い女性会長ルース・H・ファンク)

「あなたがたは、自分が低い所において他人を引き上げることはできない。……自分が心の内に燃えていなくて、ほかの人を燃やすことはできない。」(「大会報告1973-75」p.70〔1973年10月〕)

「教会は、高潔さと責任について数々の偉大な原則を教えています。……したがって、青少年の指導者には、将来世の人々の称賛を博する若人を育てていく責任があります。」(ボーン・J・フェザーストーン「すばらしい世代」p.172)

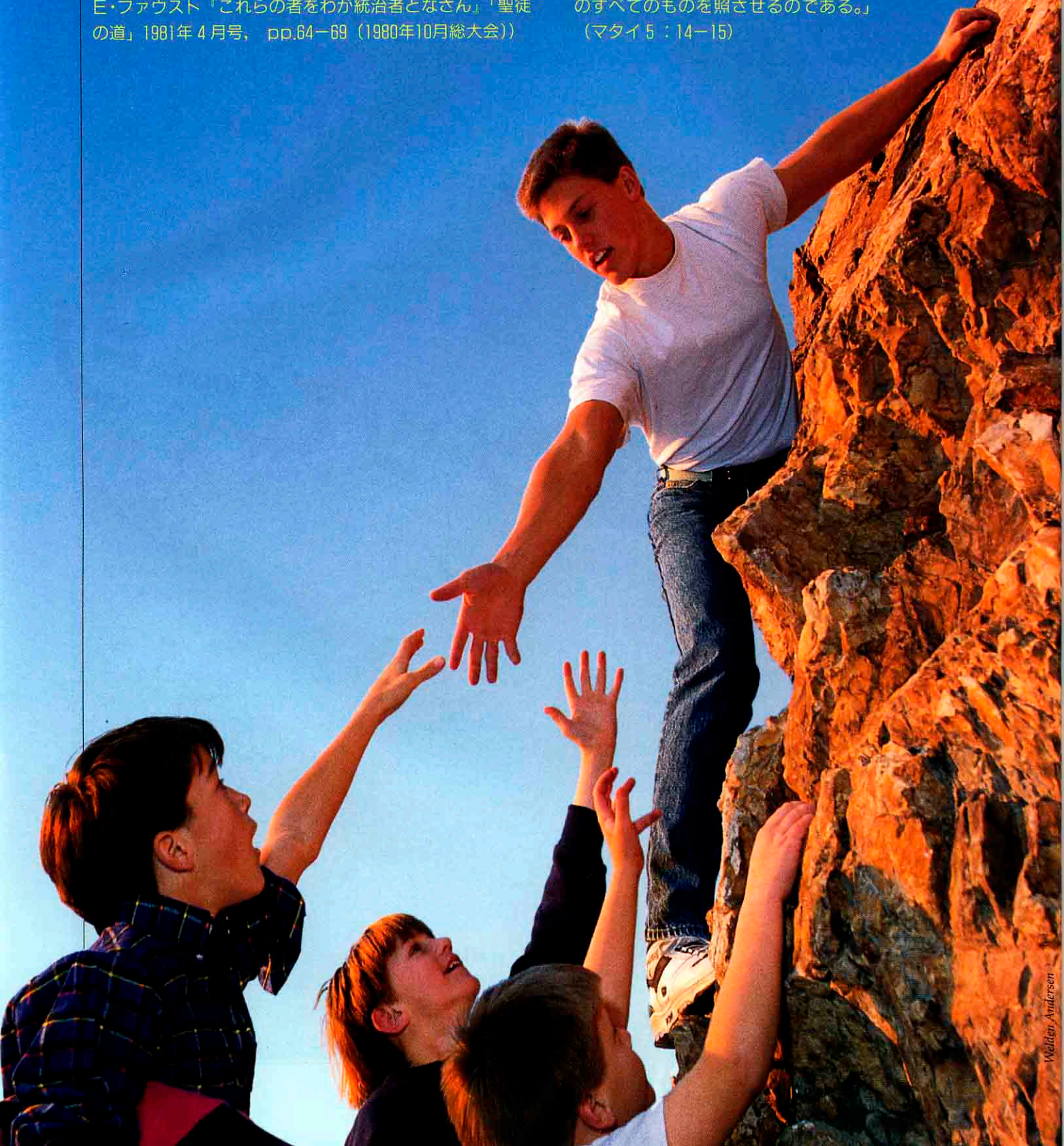
「従順は隷属のしるしではないと言われています。それどころか、従順は指導者に求められる重要な特質なのです。」(N・エルドン・タナー『救い主が導かれたごとくに』「聖徒の道」1978年1月号)





「指導者はみずから喜んで行なおうとしないことを他人に要求してはなりません。……この教会を導く人は個人として義の模範を示さなければなりません。」(ジェームズ・E・ファウスト『これらの者をわが統治者となさん』「聖徒の道」1981年4月号, pp.64-69 (1980年10月総大会))

「あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。また、あかりをつけて、それを柵の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。」(マタイ5:14-15)



もし

この  
教会を

知らな  
かったら



Walden Andersen

**ヨ**ーロッパ地域会長会の一員として働いていたときの  
ことです。私は、伝道旅行の途中、地方部大会に出  
席するためにアイルランドに来ていました。その大会で、  
アイルランド・ダブリン伝道部のジョン・オフレル第一  
副伝道部長が、話の中で、次のようなとても興味深い質問

をしました。「もしこの教会を知らなかったら、私はどうな  
っていたでしょう。」

オフレル副伝道部長は聴衆にこう尋ねました。「もし皆  
さんの生活に福音がなかったら、皆さんはどうなっていた  
でしょう。福音がなかったら、おそらくここアイルラン

そっと腕を通してみました。うれしさのあまり、思わず踊り出してしまいました。

こんなにうれしい気持ちになったことは、本当に久しぶりです。ヨハンナは船の中の乗客という乗客にこの美しいコートを見せて回りたい衝動にかられました。でも、考え直しました。これは自分だけの秘密。この赤いコートはユタで着るためにとっておかなきゃ。新しい土地に着いたら、もう一度着てみよう。ヨハンナはコートを丁寧にトランクの中にしまいました。

美しい秘密を知ったヨハンナは、残りの航海を元気よく過ごす力がわいてきました。だれひとりとして食欲がなさそうなときでも、ヨハンナだけはおなかがすいていました。船のコックと友達になって、大好きなスウェーデン風のパンケーキをよく焼いてもらいました。ヨハンナのひざの上に大きなボールを置いて、材料を混ぜ合わせたりしたのです。

3カ月たち、ようやく船はアメリカに到着しました。それからアンダーソン一家が、ミズーリ州のセントルイスにたどり着くまでには、さらに3カ月かかりました。ここで、幌のついた荷車と牛を数頭買ったり、食料品を買ったりして、大平原を横断する長旅の準備をします。

ニールスとその妻が幌馬車をゆっくりと走らせ、ヨハンナは歩いてついて行きます。ヨハンナはまだ若く、健康でしたし、鳥や動物のいる平原が大好きでした。毎日、何かしら新しい光景を見つけては、驚いたり、興奮したりしていました。時折、遠くの方に友好的なインディアンの姿も見えます。そして、歩きながらいつも頭から離れないのは、トランクの中の秘密でした。あの柔らかくて美しい赤いコ

ート。ユタの新しい家に着いたら、どんなふうに着ようかしら。考えるだけでわくわくしてきます。

ところが、開拓者の一行が気づかぬうちに、敵意を持ったインディアンたちがあとを追いかけていたのです。ヨハンナは何となくおかしいと感じて、ちょっと怖くなりました。やがて、夕方になると、隊長は幌馬車を一か所に集め、すき間なく並べて、円陣を作りました。家畜や牛は真ん中に入れました。その晩はいつものようなキャンプファイヤーも音楽もダンスもありませんでした。聖徒たちは、早く寝床に入って、静かにしているようにと指示されました。

Craig Dimond



ヨハンナは長い間歩いて疲れきっていたため、すぐに深い眠りに落ちました。しかし、ちょうど夜明けごろ、人の声と馬のひづめの音で目が覚めました。義姉さんが、静かに、と身振り<sup>ねえ</sup>で合図をしています。ニールスはベッドにはいません。

人の声は一層大きくなり、近づいてきます。耳を澄ましてみると、今まで聞いたことのない言葉です。仲間の人たちがインディアンと話をしているのです。

すると、荷台の上で人が動き回る音がしました。荷台の後ろにはヨハンナのトランクが積んであります。やがて、トランクを開ける音がしました。ニールスがインディアン

ヨハンナの母親は、娘が暗い気持ちになったとき、心の励みになるように、美しいコートを送りました。ところがそのコートのおかげで開拓者の一行は命を救われたのです。

と話をしています。

突然、人の声をやみました。インディアンの男たちは荷台から飛び降り、やがて馬に乗って去っていきました。

ニールスが戻ってくると、ヨハンナを荷台の前まで連れていきました。そしてこう言いました。「ヨハンナ、ここにいるんだよ。振り向いたり、荷台の後ろへ行ったりしたらだめだよ。お前には信仰があるだろう。主は皆をきっと守ってくださるからね。」

しかし、ヨハンナは本当のことが知りたいという気持ちをどうしても抑えることができませんでした。振り返って見ると、インディアンが裸馬に乗り、一列縦隊になって帰って行くところでした。隊列の先頭に行くのはウォーカー<sup>しゅうちやう</sup>酋長。かん高い声で奇声を発しながら、全速力で馬を走らせていきます。その肩にかかっていたのは、ヨハンナのあの美しい赤いコートでした。

ニールスは妹をしっかりと抱きしめると、こう言いました。「ヨハンナ、お前のコートがお前の命を救ったんだよ。お前の命だけではない。仲間全員の命を救ったんだ。あの鮮やかな赤が酋長の目に止まったんだよ。お前のコートを見て、気に入ったものだから、攻撃をやめて帰っていったんだ。」

アンダーソン一家は間もなくソルトレークシティーに着きました。やがてヨハンナはデンマーク人の改宗者であるジェームス・ハンセン兄弟と結婚しました。ふたりは10人の子供をもうけましたが、その子孫たちは今でもあの赤いコートの話を自分の子供たちに語り継いでいます。□

\*ピバ・メイ・ギャメル・ウィルコックスはヨハンナ・アンダーソンの曾孫にあたる。

